

総目録

著者	タイトル	巻	出版年	頁	項目1	項目2
神学ダイジェスト研究会	〈巻頭言〉刊行にあたって	1	1965	2	巻頭言	
Y・コンガール	母なる教会	1	1965	3～6	教会論一般	
R・シュナッケンブルク	信仰の聖書的概念	1	1965	7～12	信仰	
C・デーヴィス	説教の神学	1	1965	13～17	司祭職	
L・デップナー	司祭生活	1	1965	17～18	司祭職	
K・ラーナー	今日の司祭の信仰	1	1965	19～22	信仰	
J・ダルク	教会と世間における修道生活の役割	1	1965	23～26	修道生活	
L・ルグラン	独身生活	1	1965	27～29	修道生活	
L・エルシ	黙想から観想へ	1	1965	30～32	祈り	
R=L・ウシリン	教会における一般信徒の立場	1	1965	33～36	位階制	
A・ベーム	世に仕えるキリスト者	1	1965	37～39	信仰生活	
越前喜六	〈巻頭言〉無題	2	1965	2	巻頭言	
H・ジェニー	典礼憲章の一般方針	2	1965	3～6	典礼憲章	
L・ボロス	現代神学における死と死後の諸問題	2	1965	7～11	終末論	
L・ベルナルト	司祭の独身と性の問題	2	1965	12～15	司祭職	
K・ラーナー	霊を消すなかれ	2	1965	16～18	神学的エッセイ	
M・D・シュニユ	時のしるし	2	1965	19～23	神学的エッセイ	
J・ジント	初代教会における復活	2	1965	24～28	復活	
F・カルデーニャ	完全な純潔と人間の感情	2	1965	29～32	修道生活	
B・ヘーリング	不妊薬に関する神学的考察	2	1965	33～35	性倫理	
D・マイヤー	真の従順に反する奴隷根性	2	1965	36～37	修道生活	
越前喜六	〈巻頭言〉キリスト教の土着化について	3	1966	2	巻頭言	
S・リヨネ	宇宙の救い	3	1966	3～10	終末論	
A・ベア	エキュメニズムに関する教会の実践	3	1966	11～16	エキュメニズム	
R・ラトゥレール	啓示と歴史と託身	3	1966	17～21	啓示	
M・D・シュニユ	貧しき者の教会	3	1966	22～24	教会論一般	
P・アンシオー	告解の秘跡と教会の関係	3	1966	25～28	ゆるし	
F・ウタール	都市における小教区の問題	3	1966	29～33	司牧	
A・ヴェルゴート	大人の信仰生活の心理的条件	3	1966	34～38	司牧	
F・ヴルフ	独身生活と童貞性	3	1966	39～41	修道生活	
越前喜六	〈巻頭言〉将来の本誌の展望	4	1966	1	巻頭言	
I・コロシオ	現代の霊性	4	1966	2～8	霊性神学	
K・ラーナー	キリスト教と他宗教	4	1966	9～17	諸宗教の神学	
『アメリカ』誌	なぜカトリック教徒になるのか	4	1966	18～19	神学的エッセイ	
H・ラーナー	教会の本当の姿	4	1966	20～28	教会論一般	
司教覚書	貧しき人々の教会	4	1966	29～30	教会論一般	
K・コンドン	旅路の教会	4	1966	31～38	教会論一般	
H・ツァーナー	現代世界に開かれた教会	4	1966	39～43	教会論一般	
J・クイン	エキュメニズムと聖体	4	1966	44～50	エキュメニズム	
I・ゲレス	司祭の独身は時代おくれか	4	1966	51～58	司祭職	
E・リドー	レジャーの神学	4	1966	59～64	信仰生活	
海老原謙吉	ティヤール・ド・シャルダンの聖体思想	4	1966	65～72	聖体	

総目録

L・ベルナール	産児調節と人間の性	4 1966 73～77	生命倫理
P・ネメシェギ	〈巻頭言〉無題	5 1967 1	巻頭言
K・ラーナー	将来のキリスト者	5 1967 2～9	教会論一般
K・ラーナー	知られざるキリスト者	5 1967 10～17	諸宗教の神学
A・ジャニエール	無神論と現代	5 1967 18～25	無神論
J・ライリー	聖書をどう読むか	5 1967 26～34	信仰生活
I・de ラ・ポトリ(ポトゥリ)	聖書にはあやまりがない	5 1967 35～42	啓示憲章
A・ベア	教会とキリスト教以外の諸宗教	5 1967 43～49	諸宗教の神学
J・ダヴィド	新しい結婚観	5 1967 50～56	婚姻
O・ゼンメルロート	正しいマリア崇拜	5 1967 57～64	マリア論
J・トマ	労働の神学	5 1967 65～71	キリスト教的社会思
H・キュンク	恩恵の問題とキリスト者再一致	5 1967 72～78	マルティン・ルター
門脇佳吉	〈巻頭言〉経験の復権	6 1967 1	巻頭言
N・ローフィンク	旧約聖書はどう解釈すべきか	6 1967 2～9	聖書釈義学
H・ホルンシュタイン	聖書と伝承	6 1967 10～16	聖書と伝承
P・トレンブレー	神の十戒	6 1967 17～25	カテキズム
H・マッケープ	神の民	6 1967 26～33	教会論一般
W・リワク	キリストとキリスト者の支配 —黙示録にみる—	6 1967 34～39	黙示録
P・フランセン	教理神学の三つの道	6 1967 40～45	教義
H・リードマッタン	戦争と平和	6 1967 46～51	現代世界憲章
J・ラウシュ	無抵抗主義と敵への愛	6 1967 52～58	マタイ
J・ヌーナン	避妊	6 1967 59～65	性倫理
L・モンダン	奇跡のキリスト教的意味	6 1967 66～71	奇跡
B・ヘーリング	忘れ去られた兄弟愛	6 1967 72～79	司牧
福島禎一	〈巻頭言〉もっと人間味を	7 1967 1	巻頭言
E・リドー	サルトルのヒューマニズムとキリスト教	7 1967 2～11	神学的エッセイ
K・ラーナー	キリスト教的ヒューマニズムとマルクス主義的ヒューマニズム	7 1967 12～17	神学的人間論
E・パン	使徒的修道会と社会文化的変化	7 1967 18～25	修道生活
フランス調査報告	労働者への宣教	7 1967 26～30	司牧
H・ド・リュバック	すばらしき母「教会」	7 1967 31～38	教会論一般
B・ヘーリング	道徳生活の新しさ	7 1967 39～45	倫理神学一般
J・フックス	罪と改心	7 1967 46～53	罪
J・カトワール	教会と再婚	7 1967 54～59	婚姻
J・ムールー	信仰における理性の役割	7 1967 60～64	信仰生活
P・グルロー	キリストの秘義“死”	7 1967 65～72	キリスト論
L・ボロス	苦しみと死	7 1967 73～80	神学的人間論
林省吾	〈巻頭言〉対話	8 1967 1	巻頭言
P・ショーンベルク	聖体におけるキリストの現存とは	8 1967 2～10	聖体
T・マートン	降誕のよき知らせ —修道者の立場からの読み方—	8 1967 11～17	神学的エッセイ
P・ビヤール	聖書における清貧	8 1967 18～25	新約聖書神学
F・ムスナー	史実のイエズスと信仰のキリスト	8 1967 26～33	キリスト論
H・スミス	現代人に典礼は意味があるか	8 1967 34～39	典礼一般
D・アムリーヌ	キリスト教的価値と世俗的価値	8 1967 40～48	倫理神学一般

H・U・v・バルタザール	福音的生活	8	1967 49～55	修道生活
J・B・メッツ	創造的態度和しての希望	8	1967 56～63	終末論
L・ボロス	摂理について	8	1967 64～67	神学的エッセイ
B・ヘーリング	変動する倫理神学	8	1967 68～75	倫理神学一般
J・フィルハウス	〈巻頭言〉神学と歴史	9	1968 1	巻頭言
J・クレマー	キリストの復活の証言	9	1968 2～7	復活
M・ブレンドレ	初代教会の復活信仰	9	1968 8～14	復活
J・ダニエル	非神話化をどう考えるか	9	1968 15～18	新約聖書神学
A・ミシェル	原罪と人類の起源	9	1968 19～28	原罪
B・ヘーリング	キリスト者の成熟とは何か	9	1968 29～32	信仰生活
R・マッケンジー	聖書神学とはなにか	9	1968 33～40	聖書神学一般
J・マッケンジー	神感の社会的性格	9	1968 41～47	聖書神学一般
R・マルレ	世俗都市	9	1968 48～55	セキュラリズム
I・レウイス(ルース)	子どもの告解の秘跡	9	1968 56～62	ゆるし
R・ローランタン	マリアとキリスト教的女性観	9	1968 63～71	マリア論
				テイヤール・ド・シャ
C・ムーニー	テイヤール・ド・シャルダンとキリスト論	9	1968 72～80	ルダン
I・カニャーダ	〈巻頭言〉神	10	1968 1	巻頭言
R・マルレ	新約聖書の非神話化理論について	10	1968 2～9	新約聖書神学
R・E・ブラウン	ヨハネ福音書はどのようにしてできたか	10	1968 10～17	ヨハネ
M・ノバク	祈りは「おねだり」か	10	1968 18～21	祈り
E・パン	都市の小教区	10	1968 22～29	司牧
E・グートベンガー	聖体の現存の秘義	10	1968 30～37	聖体
W・カスパー	教義の歴史性	10	1968 38～45	教義
W・カスパー	教義と福音	10	1968 46～48	教義
F・クロウ	教義の発展 —キリスト教一致の助けとなるか—	10	1968 49～56	エキュメニズム
J・マッケンジー	人の子は苦しまなければならない	10	1968 57～63	受難
D・マッカーフィー	自殺《その神学的考察》	10	1968 64～68	生命倫理
J・アルファロ	ペルソナと神の恵み	10	1968 69～75	三位一体論
K・ラーナー	無信仰者に信仰を説くには	10	1968 76～80	カテキズム
古谷功	〈巻頭言〉聖書補助学の再評価	11	1968 1	巻頭言
K・ラーナー	刷新する教会	11	1968 2～7	教会論一般
L・ヘードル	神の教会と対話	11	1968 8～15	教会論一般
J・ダニエル	科学者と信仰者	11	1968 16～19	自然科学と神学
C・ムーニー	歴史に流れる霊性	11	1968 20～26	霊性神学
H・ド・リュバック	あすの聖人	11	1968 35～38	聖人
J・ナボヌ	ヨハネ福音書の主題	11	1968 39～45	ヨハネ
A・ジョルジュ	ルカ福音書における「神の子」	11	1968 46～51	ルカ
F・ヘイグ	聖書のヒューマニズム	11	1968 52～54	神学的エッセイ
J・マッケンジー	新約における律法	11	1968 57～60	新約聖書神学
D・マッカーシー	イスラエルは私の長子	11	1968 61～68	旧約聖書神学
P・グルロ	〈原罪〉を信すべきか	11	1968 69～77	原罪
編集委員	〈巻頭言〉公会議後まる三年を経て	12	1968 1	巻頭言

総目録

カナダ司教団	フマネ・ヴィテをめぐる	12	1968 2	回勅
イギリス司教団	フマネ・ヴィテをめぐる	12	1968 3	回勅
K・ラーナー	産児調節の回章《その波紋と課題》	12	1968 4～9	回勅
J・ゴルトブルンナー	信仰と深層心理学	12	1968 10～16	信仰生活
T・マルテンス	現代人と典礼	12	1968 17～26	典礼一般
Y・コンガール	一致を求める祈りの神学	12	1968 27～31	祈り
R・ラトゥレール	聖性は啓示のしるし	12	1968 32～39	啓示
J・マックオーリー	神をどのように考えたらよいか	12	1968 40～47	神概念
R・コムストック	『神の死』以後の神学	12	1968 48～56	神概念
R・ヘブルスウェイト	ジョン・ロビンソンの思想	12	1968 57～62	神学的エッセイ
J・デュボン	イエスの受けた試み	12	1968 63～69	新約聖書神学
H・シュールマン	イエスの幼年物語は歴史か	12	1968 70～76	ルカ
佐久間彪	〈巻頭言〉思而不学則殆	13	1969 1	巻頭言
J・ベッツ	過越の神秘	13	1969 2～11	新約聖書神学
ドイツ司教団	「イエスは復活した」	13	1969 12～15	復活
A・ヴァノア	共観福音書が語る受難	13	1969 16～21	受難
R・E・ブラウン	第四福音書のパラクリトス	13	1969 22～27	ヨハネ
P・アンシオー	性と婚約	13	1969 28～31	性倫理
H・ド・リュバック	人間像の理解へ	13	1969 32～35	神学的人間論
J・マレー	教会の権威と自由	13	1969 36～44	教会論一般
F・ヴルフ	司祭・修道者・信徒	13	1969 45～47	教会論一般
J・ギトン	あすの司祭像	13	1969 48～51	司祭職
J・バーンズ	説教きのうきょう	13	1969 52～57	司牧
R・ディディエ	サタンとは《その神学的考察》	13	1969 58～64	悪魔
L・A・シェーケル	言語学と文学からみた聖書釈義学	13	1969 65～71	聖書釈義学
K・ラーナー	聖体訪問のすすめ	13	1969 72～77	聖体
K・ヴァルケンホルスト	〈巻頭言〉心を信じる	14	1969 1	巻頭言
G・ローフィンク	イエスの復活と史的批判	14	1969 2～11	復活
S・リヨネ	死と復活によるあがない	14	1969 12～16	復活
R・マレー	信仰を失うとは	14	1969 17～22	信仰生活
G・ランブ	世俗化とは —新約聖書と初代教会に探る—	14	1969 23～29	セキュラリズム
K・ラーナー	神への愛と隣人愛	14	1969 30～39	信仰生活
J・C・マレー	修道誓願にまつわる弊害	14	1969 40～45	修道生活
O・ゼンメルロート	聖体祭儀と内省	14	1969 46～50	典礼神学
B・ドレイア	イエスの奇跡の宣教	14	1969 51～56	奇跡
D・マッカーシー	神の言葉と文学的装飾	14	1969 57～62	聖書釈義学
B・デ・ピント	言葉の神秘性	14	1969 63～68	神学的エッセイ
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈1〉 —クルマンとブルトマン—	14	1969 69～78	キリスト論
安田貞治	〈巻頭言〉宣教者と神学	15	1969 1	巻頭言
H・U・v・バルタザール	貧しき者の信仰	15	1969 2～13	信仰
スイス司教団	だれでも平和のために尽くせる	15	1969 14	エッセイ
B・ヘーリング	福音の革命 —暴力か非暴力か—	15	1969 15～23	キリスト教的社会思
C・スピック	神の前での人格的決断	15	1969 24～30	倫理神学一般

総目録

H・シュールマン	イエスを囲む生活	15	1969 31～39	修道生活
K・ラーナー	公会議後の神学と教導権	15	1969 40～49	教導職
G＝M・ニッシム	告解の共同祭儀	15	1969 50～56	ゆるし
L・マルヴェ	イエスのメッセージと救済史〈2〉 ―クルマン説の批判―	15	1969 57～63	キリスト論
R・グアルディーニ	パラダイスとは	15	1969 64～68	終末論
A・ヴァネステ	原罪の神学と子どもの洗礼	15	1969 69～77	原罪
J＝S・アリエタ	〈巻頭言〉神学における〈霊の識別〉	16	1969 1	巻頭言
K・ラーナー	無神論者もキリスト者たりうるか	16	1969 2～12	無神論
J・ーB・コバーン	信仰の疑い	16	1969 13	信仰
L・エヴェリー	現代人は信仰しうるか	16	1969 14～17	信仰
R・ガロディ	キリスト教とマルクス主義者の対話 ―マルクス主義の立場から―	16	1969 18～25	キリスト教とマルクス主義
J・B・メッツ	キリスト者とマルクス主義者の対話 ―キリスト者の立場から―	16	1969 26～31	キリスト教とマルクス主義
L＝J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第一回〉	16	1969 32～36	教会論一般
B・マッグラス	ミドラシュとは何か	16	1969 46～51	ユダヤ教
A・ダレス	象徴・神話・聖書の啓示	16	1969 52～60	神話
R・トウッチ	プロテスタント教会との再一致	16	1969 61～67	エキュメニズム
B・クラウス	洗礼の歴史	16	1969 68～76	洗礼
沢田和夫	〈巻頭言〉苦しい娑婆を陽気に	17	1970 1	巻頭言
L＝J・スーネンス	教会はまだまだ変わる〈第二回〉	17	1970 2～13	教会論一般
B・シュラー	教会の教導職も誤りうるか	17	1970 14～22	教導職
A・ブシャー	未来の宣教者	17	1970 23～25	福音宣教
H・ヌーウェン	新しい時代の司牧者	17	1970 26～35	司祭職
A・グリーリー	司祭はどのような指導者か	17	1970 36～42	司祭職
J・ラッツィンガー	聖書の人間観	17	1970 43～51	神学的人間論
F・デュルウェル	聖書におけるキリストとの出会い	17	1970 52～57	信仰生活
G・ディークマン	典礼と個人的信心	17	1970 58～64	典礼一般
F・ルパルニユール	キリスト者にとって病気とはなにか	17	1970 65～71	信仰生活
H・ブイヤール	キリスト教倫理と一般倫理	17	1970 72～77	倫理神学一般
土屋吉正	〈巻頭言〉信仰に生きる	18	1970 1～2	巻頭言
J・ティヤール	聖体における聖霊の働き	18	1970 4～8	聖体
I・de ラ・ポトリ	わたしは道・真理・生命である	18	1970 9～17	ヨハネ
D・ベルトラン	イエスは地獄について何を語ったか	18	1970 18～25	終末論
P・フイツィング	自然法と教会	18	1970 26～29	教会法
W・ブルクハルト	真理と教会の自由	18	1970 30～37	教会論一般
H・ミュラー	ルター十字架の黙想	18	1970 38～46	マルティン・ルター
R・レドモンド	幼児洗礼 ―歴史と司牧的問題―	18	1970 47～53	洗礼
M・ロンデ	修道生活はどうなるか	18	1970 54～57	修道生活
A・ドンデーヌ	世俗化と信仰	18	1970 58～67	セキュラリズム
A・ブルンナー	労働の聖化	18	1970 68～77	キリスト教的社会思
市川裕	〈巻頭言〉司牧者	19	1970 2～3	巻頭言
K・ラーナー	秘跡としての結婚	19	1970 4～11	婚姻

総目録

J・ラッツィンガー	結婚の神学	19	1970 12～22	婚姻
R・グアルディーニ	性の乱れ	19	1970 23～27	性倫理
M・ベレー	此岸と彼岸	19	1970 28～35	終末論
『リゴリアン』誌	民衆の抗議と市民の不服従	19	1970 36～40	キリスト教的社会思
ヘルダー・コレスポンデンツ誌	発展と衰微	19	1970 41	教会論一般
J・ーF・ガレン	女性と霊性	19	1970 42～49	霊性神学
J・バートネス	苦しみの積極的意味	19	1970 50～55	信仰生活
Y・コンガール	人間 ―この呼ばれている存在―	19	1970 56～60	神学的人間論
I・ベック	神の民の祭司職	19	1970 61～67	信徒使徒職
X・レオン・デュフル	聖書学者に期待されるもの	19	1970 68～77	聖書釈義学
井上洋治	〈巻頭言〉未来の《日本の神学》への期待	20	1970 2～7	巻頭言
B・ロナガン	神学と人間の未来	20	1970 8～17	ロナガン
G・ボウム	二千年代の教会はどうなる？ ―教会は一つの社会ではなく、動きである―	20	1970 18～25	教会論一般
R・マクブライエン	エキュメニズムのゆくえ	20	1970 26～32	エキュメニズム
Y・モルトマン	福音の新しい解釈をめざして	20	1970 33～37	新約聖書神学
J・ーW・グレーザー	大罪によって恩恵はなくなるか	20	1970 38～41	罪
G・フォーラー	旧約聖書の中心点は何か	20	1970 42～48	旧約聖書神学
P・シムソン	「神の都」のドラマ ―ルカ福音書のエルサレム物語―	20	1970 49～58	ルカ
D・ミラー	なぜ神は人となったか	20	1970 59～67	ヘブライ書
K・ラーナー	待降節の訪れ	20	1970 68～72	神学的エッセイ
J=L・モレイ	〈巻頭言〉性の人間化	21	1971 2～3	巻頭言
C・ムーニー	現代世界憲章と神学の未来	21	1971 4～14	現代世界憲章
A・プレ	独身生活の情緒的欠陥はどう補われるか	21	1971 15～23	修道生活
A・プレ	人間の性行為	21	1971 24～25	性倫理
M・ジョイス	貞潔は性の自由をもたらすか	21	1971 26～31	修道生活
J・ギエ	イエス・キリストの純潔	21	1971 32～41	キリスト論
L・ボーステン	聖書のしおり〈1〉正しい祈りとは	21	1971 41	信仰生活
M・マサール	福音の宣教は今日でも意味があるか	21	1971 42～47	福音宣教
G・クヴァール	聖書と聖伝	21	1971 48～57	聖書と伝承
K・ラーナー	復活祭の喜び	21	1971 58～63	神学的エッセイ
I・de ラ・ポトリ	人の子は上げられる	21	1971 64～73	キリスト論
M・ディベリウス	初めに永遠のみことばがあった	21	1971 74～76	ヨハネ
L・アルンブルスター	〈巻頭言〉修道生活のゆくえ	22	1971 2～5	巻頭言
A・ラーキン	修道生活に関する聖書的・神学的側面	22	1971 6～18	修道生活
D・ベルトラン	完全さは修道者の専売特許か	22	1971 19～25	修道生活
R・ヴォワイヨーム	現代人と観想	22	1971 26～33	信仰生活
F・ヘングスバハ	教会内での信徒の位置	22	1971 34～40	教会論一般
『キャソリック・マインド』	教会の共同責任性	22	1971 41～43	教会論一般
F・バクレイ	共同典礼参加の原則	22	1971 44～54	典礼神学
P・ティヤール・ド・シャルダン	諸宗教の合流	22	1971 55～61	諸宗教の神学
H・コックス	信仰の新たな可能性	22	1971 62～69	信仰
L・ボーステン	聖書のしおり〈2〉是非すべからず	22	1971 70～71	信仰生活
K・ラーナー	生ける死者の日に	22	1971 72～77	神学的エッセイ

薄田昇	〈巻頭言〉骨より肉を	23	1971 2～3	巻頭言
R・シュールマン	道の大家、マイスター・エックハルト	23	1971 4～12	中世思想
M・エックハルト	みことばを宣傳えなさい	23	1971 13～16	原典資料
B・フレニョ・ジュリアン	三位一体の神秘	23	1971 17～25	三位一体論
H・ド・リュバック	危機の渦中にある教会	23	1971 26～36	教会論一般
Y・コンガール	宣教の必要性	23	1971 37～43	福音宣教
L・ボーステン	聖書のしおり〈3〉信じること	23	1971 44～45	信仰生活
P・ド・シュルジ	福音と暴力	23	1971 46～56	新約聖書神学
A・フォンセカ	ガンジーと非暴力	23	1971 57～60	エッセイ
G・バウムバハ	イエスとファリサイ人	23	1971 61～69	キリスト論
X・レオン・デュフル	復活したイエスの現存	23	1971 70～78	復活
濱尾文郎	〈巻頭言〉神の教会	24	1971 2～3	巻頭言
M・レーラー	討論資料として —キュンク著『質問—誤りえないか』評—	24	1971 4～13	教導職
K・ラーナー	ハンス・キュンク批判	24	1971 14～20	教導職
K・ラーナー	カトリック神学における不可謬性	24	1971 21～27	教導職
ドイツ司教団	啓示と教義と信仰	24	1971 28～29	教導職
H・キュンク	なぜ私は教会にとどまっているか	24	1971 30～35	教導職
L・ボーステン	聖書のしおり〈4〉私にとってキリストとはだれか	24	1971 36～37	信仰生活
J・ボレマンス	ルカ福音のカテケシスにおける聖霊	24	1971 38～48	ルカ
H・シュリーア	時の終わり	24	1971 49～56	終末論
C・ベルナル	召命の理念	24	1971 57～68	召命
G・ーM・ペーラー	エレミヤの召命の危機	24	1971 69～78	エレミヤ
林省吾	〈巻頭言〉経験	25	1972 2～3	巻頭言
W・ライヒ／L・ファーリー	無効な婚姻をいやす道	25	1972 4～16	婚姻
C・デュコク	今日の結婚	25	1972 17～25	婚姻
W・バセット	離婚と再婚	25	1972 26～35	婚姻
L・ボーステン	聖書のしおり〈5〉復活	25	1972 36～37	信仰生活
E・スキレベークス	キリスト教の死生観	25	1972 38～41	終末論
J・オニール	イエスの沈黙	25	1972 42～46	キリスト論
H・U・v・バルタザール	なぜ私はキリスト者なのか	25	1972 47～52	信仰
J・ラッツィンガー	なぜ私は教会にとどまるのか	25	1972 53～57	信仰
J・ラッツィンガー	司祭の役務	25	1972 58～63	司祭職
K・ラーナー	主の現れ	25	1972 64～69	神学的エッセイ
J・カファレナ	神概念の吟味	25	1972 70～77	神概念
柳瀬睦男	〈巻頭言〉学問・言語・神	26	1972 2～3	巻頭言
B・ロナガン	現代こそ信頼が	26	1972 4～13	ロナガン
K・リーゼンフーバー	キリスト論の基礎的考察 —ラーナーのキリスト論—	26	1972 14～21	キリスト論
K・ラーナー	キリストの心	26	1972 22～26	神学的エッセイ
Y・コンガール	告解の秘跡に関する教えと司牧	26	1972 27～37	ゆるし
P・リガ	告解とミサ	26	1972 38～44	ゆるし
M・テュリアン	新しい奉獻文の神学	26	1972 45～58	典礼神学
W・カスパー	現代における神体験の可能性	26	1972 59～71	神体験
L・ボーステン	聖書のしおり〈6〉不正なマンモン	26	1972 72～73	信仰生活

P・ショーネンベルク	啓示と経験	26	1972 74～80	啓示
I・マルティーニ	〈巻頭言〉無題	27	1972 2～4	巻頭言
E・シャラート	なぜ司祭職を放棄するのか	27	1972 6～22	司祭職
H・シュリーア	新約聖書における司祭職	27	1972 23～30	司祭職
M・ファン・カスター	激動する現代世界の司祭	27	1972 31～45	司祭職
S・リヨネ	新約聖書と原罪	27	1972 46～52	原罪
D・スタンリー	救いといやし	27	1972 53～65	奇跡
E・リドー	テイヤール・ド・シャルダンによる「性」	27	1972 66～76	テイヤール・ド・シャ ルダン
奥村一郎	〈巻頭言〉ゼロの視点	28	1972 2～3	巻頭言
K・ラーナー	キリスト教の新しい基本的信条	28	1972 4～14	教義
K・ラーナー	現代世界観におけるキリスト論	28	1972 15～23	キリスト論
J・カファレナ	現代のキリスト教	28	1972 24～31	信仰
R・マルレ	解釈学とカテキシス	28	1972 32～36	カテキズム
J・ラッツィンガー	信仰のキリストとユーカリスト	28	1972 37	神学的エッセイ
M・ファン・カスター	イエス・キリストへの信仰	28	1972 38～46	信仰
J・モワン	歴史的確実性と信仰	28	1972 47～58	信仰
聖公会／カトリック委員会	ユーカリストの教理についての合意声明	28	1972 60～66	聖体
聖公会／カトリック委員会	合意声明とキリスト教的一致	28	1972 67～70	エキュメニズム
A・ライダー／B・バイロン	合意声明をめぐって ―解説と論評―	28	1972 71～78	エキュメニズム
瀬戸勝介	〈巻頭言〉たゆみない祈り	29	1973 2～3	巻頭言
K・ラーナー	祈りについて	29	1973 4～14	祈り
P・ホッキン	祈りの分かち合い	29	1973 15～23	祈り
J・マッケンジー	救いの意味	29	1973 24～32	救済論
F・ヴルフ	われわれの真ん中に立つイエス・キリスト	29	1973 33～38	キリスト論
X・レオン・デュフル	聖書解釈学者と歴史的出来事	29	1973 39～47	聖書釈義学
M・ケール	教会にいる喜び	29	1973 48～55	教会論一般
A・G・モリナ	教会の世論はやかましいドラか	29	1973 56～63	教導職
E・スキレベークス	新しい司祭像の神学的考察	29	1973 64～73	司祭職
J・カファレナ	イエス・キリスト ―真の人・真の神―	29	1973 74～80	キリスト論
K・ライフ	〈巻頭言〉ペンテコステより離散教会へ	30	1973 2～3	巻頭言
堀田雄康	ヨハネの「ロゴス」とパウロの「神の像」	30	1973 4～19	キリスト論
J・ラッツィンガー	実体変化をめぐって ―聖体の意味を問う―	30	1973 32～39	聖体
F・シュタインメッツ	ふさわしい主の晩餐とは	30	1973 40～42	聖体
E・ダスマン	「キリストの体―アーメン」	30	1973 43～47	聖体
J・カファレナ	信仰について	30	1973 48～55	信仰
宋 正孝	みことばの随想	30	1973 56～58	エッセイ
A・ダレス	宣教神学の動向	30	1973 60～70	福音宣教
A・ダレス	啓示の考え方とその変遷	30	1973 71～79	啓示
杉田稔	〈巻頭言〉ミシェル・クオストに倣っての祈り	31	1973 2～3	巻頭言
B・ヘーリング	世俗化時代の祈り	31	1973 4～12	祈り
J・カファレナ	〈続〉信仰について	31	1973 13～15	信仰
H・シュリーア	ヨハネ福音書におけるキリスト論	31	1973 16～27	ヨハネ

R・ヴァイヤー	「聖書のみ」か	31	1973	28～37	マルティン・ルター
J・クイーン	新約聖書における奉仕職	31	1973	38～47	司祭職
R・シュナッケンブルク	ペトロと他の使徒との関係	31	1973	48～55	位階制
W・カスパー	教会における司祭の役割	31	1973	56～67	司祭職
J・ラッツィンガー	司祭職の意義	31	1973	68～80	司祭職
A・マタイス	〈巻頭言〉愛の建設	32	1973	2～3	巻頭言
N・ローフィンク	イスラエルとユダの一致	32	1973	4～8	旧約聖書神学
W・ブルガー	教会一致の可能性	32	1973	9～15	エキュメニズム
L・A・シェーケル	あがないは連帯性を表す	32	1973	16～24	聖書神学一般
K・シェルクレ	新約聖書における報いと罰	32	1973	25～30	罪
J・カファレナ	体験と表現	32	1973	31～39	信仰
M・ケール	希望の物語 ―クリスマスに―	32	1973	40～43	神学的エッセイ
J・マッケンジー	インマヌエル	32	1973	44～49	旧約聖書神学
P・ベルナディーク	ルカにおける喜びの神学	32	1973	50～66	ルカ
R・シュルテ	神を父と呼ぶ	32	1973	67	神学的エッセイ
D・ドース	アバ、父よ	32	1973	68～74	キリスト論
O・ブルック	三位一体の影響	32	1973	75～78	三位一体論
安井光雄	〈巻頭言〉神学と教会法学の対話	33	1974	2～3	巻頭言
L・エルシ	教会における法	33	1974	4～9	教会法
R・E・ブラウン	未熟さは婚姻障害となるか	33	1974	10～15	教会法
P・パーマー	キリスト教的結婚	33	1974	16～26	婚姻
J・リアル	イエスの母がいた	33	1974	27～31	マリア論
J・ブライ	しるしと奇跡	33	1974	32～39	奇跡
Z・アルセギ／M・フリック	原罪 ―トレント公会議の真意―	33	1974	40～51	原罪
L・ジョンストン	肉と霊	33	1974	52～59	新約聖書神学
J・オルルク	ローマ書のピスティス	33	1974	60～66	ローマ書
F・キーン	多様性の神学 ―ラーナーの思想と修道生活―	33	1974	67～80	諸宗教の神学
H・クルーゼ	〈巻頭言〉新しい司祭像をめぐって	34	1974	2～4	巻頭言
パウロ六世	ラテン教会に修身助祭を復興させるための一般規則	34	1974	5～12	助祭職
E・エクリン	助祭職の神学的領域	34	1974	13～21	助祭職
J・リース	新約聖書における奉仕職のあり方 ―終身助祭職の役割をめぐって―	34	1974	22～29	助祭職
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	世界各地における助祭職の現状	34	1974	30～38	助祭職
K・シャッツ	カリスマと相対性	34	1974	39～43	聖霊
H・キュンク	神の言葉と霊のきずな	34	1974	44～46	聖霊
J・ラッツィンガー	神の民の指導者	34	1974	47～53	司祭職
H・U・v・バルタザール	新約聖書における司祭像	34	1974	54～60	司祭職
W・ヨーマンズ	信仰による祈り	34	1974	61～68	信仰生活
X・レオン・デュフル	人間は死後どうなるか	34	1974	69～80	終末論
中垣純	〈巻頭言〉福音宣教に思う	35	1974	2～4	巻頭言
H・ミューレン	堅信の秘跡	35	1974	5～13	堅信
A・ガーノーチ	感謝の祭儀	35	1974	14～26	ミサ
H・マイヤー	回心の祭儀	35	1974	27～31	ゆるし
P・パーマー	病者の塗油	35	1974	32～41	病者の塗油

総目録

L・ーJ・スーネンス	明日の教会〈第一回〉	35	1974 42～51	教会論一般
H・スミス	多忙な人の静寂の祈り	35	1974 52～59	祈り
M・ニーデンタル	福音のアイロニーとは	35	1974 60～68	新約聖書神学
K・シェルクレ	希望	35	1974 69～79	終末論
J・ソレ	〈巻頭言〉神愛と隣人愛 —U・ルスに従って—	36	1974 2～3	巻頭言
L・ーJ・スーネンス	明日の教会〈第二回〉	36	1974 4～13	教会論一般
J・エレミアス	イエスの生涯と初代教会における祈り	36	1974 14～23	典礼史
F・ハーン	新約聖書と初代教会にみる宣教	36	1974 24～37	福音宣教
R・マルレ	現代人の信仰告白を試みて	36	1974 38～48	教義
J・カファレナ	救い主	36	1974 49～56	キリスト論
H・マンデルス	誰が典礼の主体か	36	1974 57～62	典礼神学
P・グルロ	聖書への三つの問い	36	1974 63～69	旧約聖書神学
J・ゲルハルト	教会基本法は必要か	36	1974 70～79	教会法
A・G・エバンヘリスタ	〈巻頭言〉私の修道生活の意味	37	1975 2～3	巻頭言
C・チェリアン	いま、私の目で神を見る —宗教体験の記録としての聖書—	37	1975 4～13	神体験
W・コナリー	長所を生かす霊的指導	37	1975 14～17	霊的指導
G・アシェンブレンナー	意識の糾明	37	1975 18～27	イエズス会霊性
P・シュンゲル	イエスの死	37	1975 28～35	キリスト論
Y・コンガール	働く聖霊	37	1975 36～47	聖霊
N・アベヤシンガ	回心の秘跡と聖霊	37	1975 48～54	ゆるし
H・キュンク	洗礼の完成としての堅信の秘跡	37	1975 55～67	堅信
J・ウィナンディ	最後の審判の情景	37	1975 68～79	終末論
T・オーブオンク	〈巻頭言〉「心を込めて神を仰ぎ」	38	1975 2～4	巻頭言
G・カールソン	死から命へ —霊的指導と過越の神秘—	38	1975 5～15	霊的指導
J・ドミニアン	独身生活と共同体	38	1975 16～23	修道生活
K・ラーナー	信仰の核心は生の中軸	38	1975 24～33	信仰
P・ホッキン	キリスト者はどう祈るか	38	1975 34～41	祈り
T・デュベイ	黙想の諸形質とその問題	38	1975 42～53	祈り
J・リース	セレブレーションと宣教	38	1975 54～61	福音宣教
G・ソレアス・プラグ	福音書は歴史的か	38	1975 62～69	聖書釈義学
R・ベロディ	罪の意識と赦し	38	1975 70～79	ゆるし
景山あき子	〈巻頭言〉聖霊とともに	39	1975 2～3	巻頭言
W・ヘルプストリート	リジューのテレーズにおける〈とりなし〉と〈連帯〉	39	1975 4～11	霊性一般
J・ギエ	イエススの死苦と人間	39	1975 12～19	キリスト論
R・バウマン	イエススの復活とは何をいうのか	39	1975 20～31	復活
K・ラーナー	復活信仰の霊性をめぐって	39	1975 32～41	復活
J・カファレナ	キリストの神秘	39	1975 42～49	キリスト論
D・ハスキン	啓示の継続	39	1975 50～55	啓示
K・ラーナー	教会の使命は世界を人間らしくすることか	39	1975 56～62	教会論一般
G・ラップ	宗教的多様性とその課題	39	1975 63～67	諸宗教の神学
H・ラヴァレット	性と政治	39	1975 68～80	倫理神学一般
白柳誠一	〈巻頭言〉適切な表現と提示方法	40	1976 2～3	巻頭言
K・ラーナー	病者の自由 —その神学的考察—	40	1976 8～18	生命倫理

総目録

C・サイクス	ティヤール・ド・シャルダンと宇宙的キリスト	40	1976 19～25	ティヤール・ド・シャルダン
H・ヌーウェン	歓待のすすめ ―ホスピタリティーとキリスト者―	40	1976 26～29	司牧
B・エリソンド	聖書に学ぶ福音宣教	40	1976 30～40	福音宣教
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈1〉	40	1976 41～49	復活
L・サブラン	イエスの奇跡	40	1976 50～58	奇跡
R・コスト	マルクス主義とキリスト者の生活	40	1976 59～65	キリスト教とマルクス主義
J・マーティン	マタイにおける教会	40	1976 66～74	教会論一般
山本襄治	〈巻頭言〉神学と司牧	41	1976 2～3	巻頭言
G・ローフィンク	死後、何が到来するか	41	1976 4～15	終末論
L・ケーシー	安楽死の倫理 ―カレン・クインランの場合―	41	1976 16～21	生命倫理
B・バトラー	新約聖書のマリア	41	1976 22～31	マリア論
M・ーD・シュニユ	労働のキリスト教的意味	41	1976 32～45	キリスト教的社会思
J・フットレル	創立者のカリスマ発見	41	1976 46～53	修道生活
A・ロツェッター	フランシスコの現代への示唆	41	1976 54～59	霊性一般
J・ティヤール	変革が必要な修道生活	41	1976 60～74	修道生活
J・ラデルマーケス	復活したキリストを宣教する〈2〉	41	1976 75～78	復活
早副稔	〈巻頭言〉自らの信仰体験を整理して語れるものをもちたい	42	1977 2～3	巻頭言
J・ラッツィンガー	洗礼と信仰および教会所属	42	1977 4～17	洗礼
J・G・ソボサン	神秘主義の道	42	1977 18～24	神秘主義
H・スタッフアー	改宗者は霊的独自性を捨てるのか ―アジアの伝統的宗教とカトリックとの関係―	42	1977 25～30	諸宗教の神学
H＝J・クラウス	捕囚帰還後の律法理解	42	1977 31～44	旧約聖書神学
C・P・マイヤー	神とその「可視性」 ―神学における神体験と神認識について―	42	1977 45～51	神概念
J・M・ロビラ	今日の〈赦しの秘跡〉	42	1977 52～61	ゆるし
D・デイドベール／P・M・ベールネール	イエスはガリラヤにきた ―マルコ1章21～45の解釈―	42	1977 62～68	マルコ
J・デュボン	至福について	42	1977 69～79	新約聖書神学
高柳俊一	〈巻頭言〉神学の未来？	43	1977 2～3	巻頭言
Y・コンガール	教導職と神学者	43	1977 4～11	教導職
J・カーモディ	カトリック神学の今後の課題	43	1977 12～21	諸宗教の神学
西独カトリック教会会議	われわれの希望 ―現代の信仰告白―	43	1977 22～36	教会論一般
K・ヘンメルレ	宣教の火を消すな	43	1977 37～41	福音宣教
W・カスパー	伝承と自由	43	1977 42～46	聖書と伝承
M・ウォルシュ	聴けイスラエル〈申命記 その1〉	43	1977 47～51	申命記
C・J・パイファー	刷新の青写真〈申命記 その2〉	43	1977 52～57	申命記
L・ドゥーハン	イエスと祈り	43	1977 58～63	祈り
D・ヒル	I ペトロ書における苦しみと洗礼	43	1977 64～71	I ペトロ書
J・M・ティヤール	信仰に生きる修道者	43	1977 72～80	修道生活
赤波江春海	〈巻頭言〉道－真理－命	44	1978 2～3	巻頭言
P・アルペ	飢餓と福音宣教	44	1978 4～15	福音宣教
W・カスパー	「神の子」の理解について	44	1978 16～28	神の子
Y・ラガン	祈りの技術	44	1978 29～35	祈り

総目録

P・G・ファン・ブレーメン	受容を受け入れる勇氣	44	1978 36～40	信仰生活
K・ラーナー	熱狂と修道者	44	1978 41～43	聖霊
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(1)	44	1978 44～54	聖霊
J・アルファロ	死とキリスト教的希望	44	1978 55～65	終末論
R・F・コリンズ	イエスとニコデモとの会話	44	1978 66～73	新約聖書神学
I・de ラ・ポトリ	真理を行う	44	1978 74～80	新約聖書神学
押田成人	〈巻頭言〉安物買いのぜに失い	45	1978 2～3	巻頭言
Z・アルセギ	ゆるしの祭儀の刷新	45	1978 4～10	ゆるし
J・モルトマン	三一的神の歴史	45	1978 11～23	三位一体論
L・A・シェケル	イヨブ記を戯曲的に読むために	45	1978 24～35	ヨブ
P・ベルナディク	ルカ福音書における旅行記の霊性	45	1978 36～46	ルカ
K・シェルク	ヨハネス福音書における教会	45	1978 47～53	ヨハネ
『プロ・ムンディ・ヴィタ』	カトリック教会のペンテコスタリズム(2)	45	1978 54～62	聖霊
J・スードブラック	患難のうちにも誇る	45	1978 63～71	信仰生活
J・M・カスティリヨ	社会と霊的生活のずれ	45	1978 72～79	霊性神学
渡辺和子	〈巻頭言〉「君は君、我は我なり、されど仲良き」	46	1979 2～3	巻頭言
H・ミューレン	マリア論の新しい動向	46	1979 4～11	マリア論
W・バイナート	今日のマリア崇敬	46	1979 12～24	マリア論
C・フォガン	マルコス福音書における弟子たちの盲目性	46	1979 25～29	マルコ
M・A・ゲッツィ	ローマ書における使徒パウロス —今日の教会へのメッセージ—	46	1979 30～36	ローマ書
F・ムスナー	「ガリラヤ危機」というものはあったか	46	1979 37～46	キリスト論
J・ツィンク	門	46	1979 47	エッセイ
J・ギエ	イエス・キリストの中になされた経験	46	1979 48～54	キリスト論
V・コディナ	場末に息づく信仰	46	1979 55～61	神学的エッセイ
H・ゲルツ	テロリズムの原因	46	1979 62～64	キリスト教的社会思
J・パスキエ	体験と回心	46	1979 65～72	信仰生活
J・M・カスティリヨ	新しい奉仕職の確立	46	1979 73～78	教会論一般
三好迪	〈巻頭言〉聖書研究と教理神学	47	1979 2～3	巻頭言
D・シニア	イエスとはだれか —現代キリスト論の課題—	47	1979 4～15	キリスト論
W・ケルン	「共に食事すること」	47	1979 16～23	キリスト論
G・ローフィンク	神学における「物語り」 —福音書の言語上の基本構造—	47	1979 24～35	新約聖書神学
K・ラーナー	意味への問い —神の全き秘義に人生の意味を問う—	47	1979 36～43	神学的エッセイ
K・ヘムメル	忙しさとクリスマス	47	1979 44～46	エッセイ
N・ローフィンク	安息と余暇	47	1979 47～58	旧約聖書神学
P・ヒューナーマン	イエスの力と無力	47	1979 59～65	キリスト論
I・de ラ・ポトリ	イエスとサマリア人	47	1979 66～79	ヨハネ
和田幹男	〈巻頭言〉日本のカトリック神学を考える	48	1980 2～3	巻頭言
プエブラ司教会議	福音宣教	48	1980 4～11	福音宣教
O・v・ネル・ブロイニング	世界に対する教会の使命	48	1980 12～25	教会論一般
S・ガリレア	解放の神学	48	1980 26～48	解放の神学
R・ペッツシュ	ペトロスによるメシア告白	48	1980 49～56	マルコ
G・オーコリンズ	イエスは自らの死をどのように理解したか	48	1980 57～68	キリスト論
U・ヴィルケンス	聖餐と教会一致	48	1980 69～86	エキュメニズム

総目録

J・マクポリン	ルカスとヨハネスにおける聖霊	48	1980 87～104	聖霊
K・シェーファー	祈りの意味	48	1980 105～112	祈り
池長潤	〈巻頭言〉源泉としての信仰体験	49	1980 2～3	巻頭言
G・グレースハーケ	神の愛に召されている人間	49	1980 4～24	三位一体論
O・H・ペッシュ	死と信仰	49	1980 25～48	終末論
G・スヴィテク	共同体の霊動弁別	49	1980 49～60	イエズス会霊性
R・ローランタン	「カリスマ」とは何か	49	1980 61～71	聖霊
P・シュミッツ	良心 —危機に立たされる倫理規範—	49	1980 72～85	倫理神学一般
J・ボイトラー	新約聖書による霊的指導	49	1980 86～98	霊的指導
W・ヴォーゲルス	「構造分析」と司牧 —ザカイオスの物語—	49	1980 99～112	聖書釈義学
白柳誠一	〈巻頭言〉真理に仕える使命	50	1981 2～3	巻頭言
P・アルペ	〈巻頭言〉愛と正義	50	1981 4～9	巻頭言
J・ピタウ	〈巻頭言〉日本への巡礼	50	1981 10～11	巻頭言
越前喜六	〈巻頭言〉神学の日本化を目指して	50	1981 12～13	巻頭言
M・トーレス＝アルピ	〈巻頭言〉牧者なる主の声	50	1981 14～16	巻頭言
熊沢義宣	エキュメニズムに関する二、三の考察	50	1981 17～19	エキュメニズム
J・モルトマン	不安の時代におけるキリスト	50	1981 20～34	終末論
P・ヒューナーマン	教会と聖職	50	1981 35～49	位階制
R・ブーシェー	「明日の司教とは」	50	1981 50～61	司教職
J・P・ハイル	マタイオス福音書における癒しの奇跡	50	1981 62～77	マタイ
J・ボーツ／P・ド・フリース	霊的指導を与えるときの原則	50	1981 78～79	霊的指導
J・ダルク	賛美のいけにえ	50	1981 80～85	祈り
M・サイモン	礼拝のための空間づくり	50	1981 86～98	司牧
山本襄治	〈巻頭言〉神学する心	51	1981 2～3	巻頭言
K・ラーナー	「世界の教会」への飛躍	51	1981 4～15	教会論一般
H・U・v・バルタザール	とらえがたきものに頼る	51	1981 16～32	信仰
A・ジョルジュ	救い主の誕生 —ルカスによる誕生物語の研究—	51	1981 33～50	ルカ
D・バール	ドラマとしてのマタイオス福音書 —その構造と意図の再考察—	51	1981 51～60	マタイ
C・ラッシュ／G・ルヴェーク／L・デュポン	ヨハネス20章の構造	51	1981 61～76	ヨハネ
J・ラムブレヒト	共観福音書における〈たとえ話〉	51	1981 77～92	新約聖書神学
J・ラッツィンガー	肉体の復活	51	1981 93～109	終末論
栗本昭夫	〈巻頭言〉日本の教育とキリスト教神学	52	1982 2～3	巻頭言
J・ソブリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(前半)	52	1982 4～27	キリスト論
C・バンベルク	現代人と礼拝	52	1982 28～41	典礼神学
L・A・シェーケル	回心の典礼 —詩編50と51に見る	52	1982 42～49	詩編
H・U・v・バルタザール	新約聖書から見た召命	52	1982 50～60	召命
H・ロッター	救いと性の倫理	52	1982 61～73	性倫理
G・オホマニー	秘跡・典礼の新しい理解 —洗礼・ゆるし・病者の塗油の秘跡をめぐる	52	1982 74～84	洗礼
M・T・ウィンスタンリー	弟子の道と孤独 —マルコス福音書を黙想して—	52	1982 85～94	受難
K・ラーナー	イエスの復活	52	1982 95～112	復活
赤木善光	〈巻頭言〉典礼への関心	53	1982 2～4	巻頭言
J・ソブリノ	歴史上のイエスと信仰のキリスト(後半)	53	1982 5～24	キリスト論
T・キーティング	集中の祈り	53	1982 25～33	祈り

E・ウッドワード	修道生活と憂鬱症	53	1982	34～68	修道生活
H・U・v・バルタザール	少年の召命	53	1982	69～71	召命
L・A・シェーケル	神の不在 —詩編42・43の詩的構造—	53	1982	72～81	詩編
N・ローフィンク	「生めよ、ふえよ、地を従わせよ」?	53	1982	82～100	旧約聖書神学
J・ホワイトヘッド	「今の時をよく用いなさい」	53	1982	101～103	信仰生活
					サクラメントウム・ムン
P・スラルダース	創造	53	1982	104～112	ディ
宇佐美公史	〈巻頭言〉波のはざままで	54	1983	2～5	巻頭言
J・モルトマン	テレジアとルター	54	1983	6～25	マルティン・ルター
P・ジェルヴェ	ゆるしの秘跡	54	1983	26～45	ゆるし
W・ケレン	キリスト者は保守的か	54	1983	46～61	キリスト論
M・A・シュヴァリエ	聖霊の降臨 —ルカスとヨハネスにおいて—	54	1983	62～71	聖霊
K・ドノヴァン	典礼の逆説	54	1983	72～78	典礼一般
G・マルク	カトリック教会の未来(一)	54	1983	79～102	教会論一般
K・ラーナー	原罪	54	1983	103～112	原罪
徳善義和	〈巻頭言〉賞讃と忘却のはざまのルター	55	1983	2～4	巻頭言
K・ラーナー	霊の体験	55	1983	5～23	神体験
M・スコット	預言者エリヤと神の出会い	55	1983	24～29	修道生活
F・ロンバルディ	核エネルギーの倫理的次元	55	1983	30～35	社会倫理
W・クラフト	マスターベーション・性の考察	55	1983	36～45	性倫理
H・ワンズブラ	聖書における平和	55	1983	46～53	聖書神学一般
G・オマホーニ	死後への不安と願望	55	1983	54～62	終末論
S・M・シュナイダース	ヨハネス福音書と女性像	55	1983	63～81	ヨハネ
G・マルク	カトリック教会の未来(二) —教会が直面する七つの挑戦—	55	1983	82～99	教会論一般
					サクラメントウム・ムン
K・ラーナー	あがない	55	1983	100～112	ディ
沢田和夫	〈巻頭言〉一致志向の霊性	56	1984	2～4	巻頭言
E・スキレベークス	核非武装論 —平和の福音を生きる—	56	1984	5～16	信仰生活
F・ドレフェス	神のことばに仕える教会	56	1984	17～28	聖書釈義学
F・ドレフェス	神のことばの現実化	56	1984	29～42	聖書釈義学
R・ガスペリス	神のことばを祈る	56	1984	43～54	聖書釈義学
W・ウォーカー	ヨハネスによる「主の祈り」?	56	1984	54～66	新約聖書神学
H・ファイフェル	ホスピス —死は人間性の破壊か—	56	1984	67～72	司牧
W・レーザー	ルター像の変遷	56	1984	73～84	マルティン・ルター
J・プロセーダー	新しい出会い〈カトリックのルター受容〉	56	1984	85～94	マルティン・ルター
堀江節郎	新しい神学	56	1984	95～96	神学的エッセイ
H・J・ポットマイヤー	信徒による司牧的奉仕	56	1984	97～104	信徒使徒職
E・ニールマン	司祭	56	1984	105～111	司祭職
百瀬文晃	〈巻頭言〉教会への奉仕としての神学	57	1984	2～4	巻頭言
岩島忠彦	カール・ラーナー —人と思想—	57	1984	5～14	カール・ラーナー
K・ラーナー	〈神秘〉概念の再吟味	57	1984	15～41	基礎神学一般
K・ラーナー	三位一体に関する考察	57	1984	42～60	三位一体論
K・ラーナー	イエスの人性について	57	1984	61～72	キリスト論

総目録

J・B・メッツ K・ラーナー	カール・ラーナー ―ひとつの神学的生涯― 日常に生きる永遠 ―カール・ラーナー抜粋集―	57 1984 73～86 57 1984 87～114	カール・ラーナー カール・ラーナー サクラメントウム・ムン
K・ラーナー 神学ダイジェスト編集室 森一弘 J・モルトマン J・ラッツィンガー J・セグンド P・デーゼラース J・フィッツ J・F・オグレイディ C・E・カラン J・パリス／R・クランフォード H・ロッター J・シュヴァルツ	死 カール・ラーナー主要文献リスト(邦語) 〈巻頭言〉よろこびのこだまとしての福音宣教 父なる神を信ず―神についての家父長的話法か、非家父長的話法か― 解放の神学批判 解放の神学に見る二つの流れ 民の癒し手、ヤーウェ ―トビア書に見る聖書の救済論― モーセ、今求められる指導者像 主に愛された弟子 規範的倫理から司牧的配慮へ 脳死―生と死のはざま― 教会法の枠組みと再婚の現実 聖座の外交関係	57 1984 115～121 57 1984 122～128 58 1985 2～4 58 1985 5～16 58 1985 17～26 58 1985 27～37 58 1985 38～47 58 1985 48～50 58 1985 51～60 58 1985 61～74 58 1985 75～85 58 1985 86～94 58 1985 95～103	ディ カール・ラーナー 巻頭言 フェミニスト神学 解放の神学 解放の神学 トビト記 神学的エッセイ ヨハネ 司牧 生命倫理 婚姻 教皇庁関係 サクラメントウム・ムン
フュークリスター 橋口倫介 A・ダレス W・カスパー M・デュメ J・R・ダナヒュー W・ヴォーゲルス M・J・バックレー N・ローフィンク F・レンツェンダイス	過越し 〈巻頭言〉福音の文化的受容への期待 カトリシズムの本質 ―プロテスタントとカトリックの観点をめぐって― 救いの普遍的秘跡たる教会 信仰と文化との出会い 平和の福音 ―ルカ福音書釈義― ヨブの霊的成長 弱さを身に負うがゆえに 世における正義と司祭職 福音書という文学	58 1985 104～112 59 1985 2～4 59 1985 5～25 59 1985 26～44 59 1985 45～56 59 1985 57～68 59 1985 69～76 59 1985 77～83 59 1985 84～98 59 1985 99～107	ディ 巻頭言 カトリシズム 教会論一般 インカルチュレーショ ルカ ヨブ 司祭職 司祭職 聖書釈義学 サクラメントウム・ムン
W・ブロイニング 犬飼道子 G・ローフィンク A・ニコラス 宇佐美公史 C・マルティニ M・P・ギャラガー E・A・ディードリック T・A・ケイン K・シューベルト	聖徒の交わり 〈巻頭言〉信徒使徒職 ―一、二の考察― イエスの非暴力要求 聖書の読み方と祈り 今日聖書をいかに読むか 最初の弟子たち 「教会離れ」と司牧の実践 典礼改革に見る聖体の秘跡 精神療法 ―心のいやし― イエスの復活 ―そのユダヤ教的観点―	59 1985 108～112 60 1986 2～4 60 1986 5～23 60 1986 24～40 60 1986 41～50 60 1986 51～55 60 1986 56～65 60 1986 66～81 60 1986 82～89 60 1986 90～101	ディ 巻頭言 マタイ 聖書神学一般 聖書神学一般 祈り 司牧 聖体 司牧 復活 サクラメントウム・ムン
E・ニールマン F・アリンゼ K・シャッツ M・アマラドス	信徒 〈巻頭言〉諸宗教との対話の可能性を求めて 公会議後の教会の危機 対話は宣教と両立するか	60 1986 102～108 61 1986 2～6 61 1986 7～18 61 1986 19～28	ディ 巻頭言 教会論一般 諸宗教の神学

総目録

P・ニッター S・ドゥクルー J・カヴァノー R・マッコーマック J・オドネル	キリスト教は真にして絶対の宗教か 修道生活における対神関係 資本主義文化とキリスト者 「生かすべきか、死なすべきか」 聖霊の神学 ―イエスと霊―	61 1986 39～51 61 1986 52～62 61 1986 63～72 61 1986 73～83 61 1986 84～103	諸宗教の神学 修道生活 信仰生活 生命倫理 聖霊 サクラメントウム・ムン
K・ラーナー M・P・ギャラガー J・フィッツマイヤー R・ロンマースキルヒ F・F・クラヴェール R・プツァ K・ケリー M・R・ソーズ P・D・ハンソン M・ゼックラー	キリストの再臨 〈巻頭言〉無神論の多様性を理解する キリストの昇天と聖霊降臨 最後の修道院 教会と革命 教会における再婚者の復権 良心の成熟を目指して パウロの手紙における「神の義」 旧約聖書における戦争と平和 啓蒙と啓示の相互依存	61 1986 104～112 62 1987 2～4 62 1987 5～25 62 1987 26～35 62 1987 36～48 62 1987 49～56 62 1987 57～69 62 1987 70～79 62 1987 80～99 62 1987 100～106	ディ 巻頭言 新約聖書神学 修道生活 アジアの教会 婚姻 信仰生活 パウロ神学 旧約聖書神学 啓示 サクラメントウム・ムン
R・シュルテ 長島世津子 R・E・ブラウン C・デュコック H・J・クラウク G・キーレンケリイ S・J・エマヌエル K・ラーナー カルメル会 L・ギツリック	秘跡(1) 〈巻頭言〉教会と信徒の行方 聖書的な祭司職の要請 信仰の活動的な主体である信徒 役職のない共同体―ヨハネ文書における教会の経験 新約聖書における信徒の役割 アジアの教会における信徒 成熟したキリスト者とは 心の旅 ―捕らわれの記録― 見えることと見えないこと	62 1987 107～112 63 1987 2～5 63 1987 6～15 63 1987 16～25 63 1987 26～48 63 1987 49～57 63 1987 58～72 63 1987 73～84 63 1987 85～95 63 1987 96～104	ディ 巻頭言 司祭職 信徒使徒職 教会論一般 信徒使徒職 アジアの教会 信仰生活 エッセイ 祈り サクラメントウム・ムン
R・シュルテ 岸千年 J・H・ライト J・オコーリンズ K・H・シェルク F・リンチ N・ローフィンク L・D・デイヴィス A・ジョーンズ J・ダルリムプル J・ズートブラック	秘跡(2) 〈巻頭言〉聖書を起点として 教会 ―聖霊の共同体― キリストの復活 実存的解釈における非神話化 アナムカラ ―一致の祈りと説教への招き― 神の治療処置である修道会 この世の子らから学ぶ イスラム教 ―キリスト教への挑戦― 平和でなく剣を ベタニアの兄妹たち	63 1987 105～112 64 1988 2～6 64 1988 7～25 64 1988 26～32 64 1988 33～43 64 1988 44～54 64 1988 55～67 64 1988 68～76 64 1988 77～86 64 1988 87～94 64 1988 95～103	ディ 巻頭言 教会論一般 復活 聖書釈義学 祈り 修道生活 エッセイ イスラム教 福音宣教 祈り サクラメントウム・ムン
H・フリース／J・フィンスタヘルツル 野間順子 W・バイネールト	無謬性 〈巻頭言・全世界に行って〉ブルキナ・ファソの兄弟と共に生きる 聖人 ―キリストの救いの体現者―	64 1988 104～112 65 1988 2～6 65 1988 7～22	ディ 巻頭言 聖人

R・E・ブラウン	現代における聖書と教義の関係	65	1988 23～29	聖書釈義学
R・マーレイ	預言・政治・司祭職	65	1988 30～43	司祭職
W・カスパー	世界における信徒の使命	65	1988 44～58	信徒使徒職
A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅰ)	65	1988 59～74	教会論一般
O・v・ネル・ブロイニング	制度化された不正とは何か	65	1988 75～80	罪
I・カマーチョ	〈教会の社会教説〉を解釈するための四つの鍵	65	1988 81～96	キリスト教的社会思
H・グロース	「主は豊かなあがないに満ち」	65	1988 97～105	旧約聖書神学
J・シュプレット	「肉体」と「靈魂」	65	1988 106～111	サクラメントウム・ムン ディ
A・フェークトレ／I・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅰ)	66	1989 100～111	ディ
K・リーゼンフーバー	〈巻頭言〉現代に神を語る	66	1989 2～5	巻頭言
J・ブエリエ	連帯する神の民	66	1989 6～22	旧約聖書神学
金 壽煥(キム・スファン)	聖体大会にむけて	66	1989 23～31	聖体
金 勝恵(キム・スンヘー)	解放とインカルチュレーション	66	1989 32～39	インカルチュレーショ
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅰ)	66	1989 40～49	旧約聖書神学
T・E・クラーク	貧しい人々の側に立つ選択	66	1989 50～59	キリスト教的社会思
L・S・ケーヘル	山上の説教の倫理的な意味	66	1989 60～69	倫理神学一般
A・ピエリス	解放の視点からみた霊性	66	1989 70～82	霊性神学
A・ニコラス	教会・宣教・キリスト者の生活(Ⅱ)	66	1989 83～99	解放の神学
伊従直子	〈巻頭言〉「神の似姿」に創られ	67	1989 2～4	巻頭言
H・S＝シュトラウマン	母なる神 ―ホセア11章に表れた神のイメージ―	67	1989 5～20	ホセア
P・バック	聖書と教会における預言(Ⅱ)	67	1989 21～31	新約聖書神学
R・ブレナン	民衆の神学とは	67	1989 32～40	民衆の神学
U・アダムス	社会の周辺から	67	1989 41～55	祈り
N・グライナツハー	離婚と再婚の問題	67	1989 56～65	婚姻
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅰ)	67	1989 66～82	諸宗教の神学
P・ワークドルフ	祈りの手引き	67	1989 83～91	祈り
J・モルトマン	イエスと神の国	67	1989 92～105	神の国 サクラメントウム・ムン
A・フェークトレ／I・マイシュ	イエス・キリスト(Ⅱ)	67	1989 106～112	ディ
雨宮慧	〈巻頭言〉求心的な動き	68	1990 2～4	巻頭言
J・オウドンネル	司祭のアイデンティティーと霊性	68	1990 5～16	司祭職
R・ヒューブナー	初代教会における執事・長老・監督職の起源	68	1990 17～35	位階制
M・ハルト	教皇制度と教会一致運動	68	1990 36～50	教皇職
J・I・ゴンザレス・ファウス	ペトロの誘惑	68	1990 51～61	祈り
S・バイナダス	真の解放 ―観想と活動―	68	1990 62～75	祈り
J・J・ギル	イメージの召命論	68	1990 76～82	召命
A・ピエリス	仏教とキリスト教(Ⅱ)	68	1990 83～95	諸宗教の神学
J・モルトマン	キリストの復活と世界の希望	68	1990 96～106	復活 サクラメントウム・ムン
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅲ)	68	1990 107～112	ディ
佐藤敬一	〈巻頭言〉神様に喜んでいただくために	69	1990 2～5	巻頭言

総目録

P・H・コルベンバツハ 田渕文男 J・B・メッツ 岩島忠彦 P・M・ツレーナー N・ギルメット T・P・ローシュ R・グラムリッヒ M・サール R・マレー	〈巻頭言〉二十五周年を祝って 〈巻頭言〉『神学ダイジェスト』の四半世紀と若干の具体案 公会議 ―「一つの手始めの手始め」？― イエスの姿を求めて 教会のヴィジョン 聖パウロと女性 倫理の諸問題とエキュメニズム 「不偏心」とイスラム教 堅信を巡る現在の状況 霊的友情	69 1990 6～7 69 1990 8～10 69 1990 11～22 69 1990 23～41 69 1990 42～50 69 1990 51～63 69 1990 64～69 69 1990 70～77 69 1990 78～90 69 1990 91～105	巻頭言 巻頭言 教会論一般 キリスト論 教会論一般 パウロ神学 エキュメニズム イスラム教 堅信 霊性神学 サクラメントウム・ムン	
K・ラーナー	イエス・キリスト(Ⅳ)	69 1990 106～112	ディ	
鈴木宣明 A・デムステイエ J・ソブリノ M・ヘルヴィヒ	〈巻頭言〉イグナティウスの霊性の歴史体験 最初のイエズス会員たちと貧しい人々 『霊操』におけるキリスト 王たるキリストの招き 神の愛に動かされて ―イグナチオの霊操の神学的諸観点とイエズス会員の 行動様式の特徴― 二十一世紀に向かう宣教 病気をいやす賜物 ―イエスと病人たち― イエスの受難 眠っている神 ―古代中近東の神話と聖書思想―	70 1991 2～5 70 1991 6～17 70 1991 18～37 70 1991 37～44	霊性神学 イエズス会霊性 イエズス会霊性 イエズス会霊性	イグナチオ・ デ・ロヨラ
E・クンツ R・J・シュライター A・ヴァイザー H・シュペーマン B・F・バット		70 1991 45～61 70 1991 62～72 70 1991 73～81 70 1991 82～87 70 1991 88～105	イエズス会霊性 福音宣教 新約聖書神学 祈り 旧約聖書神学 サクラメントウム・ムン	
K・ラーナー 岳野慶作 R・M・サンス・デ・ディエゴ F・ルイス R・キナスト S・クロイツァー A・ハント K・ヘルツォーク L・ブレンダン J・A・コールマン D・E・メイヤー Q・R・コナーズ	イエス・キリスト(Ⅴ) 〈巻頭言〉『レーラム・ノヴァルム』発布百周年 教会の社会教説 ―百年と二十五年― 十字架の聖ヨハネの霊性の主要側面 生活の場で行う霊操 「母なる神」の再検討 他宗教に救いはないのか？ ―諸宗教神学の可能性― 女性と戦争と平和 天におけるごとく地にも(1) 世俗 ―その社会学的考察― 修道院会計の見直し 修道者養成における危機の役割	70 1991 106～112 71 1991 2～5 71 1991 6～19 71 1991 20～29 71 1991 30～35 71 1991 36～44 71 1991 45～55 71 1991 56～73 71 1991 74～82 71 1991 83～90 71 1991 91～95 71 1991 96～101	ディ 巻頭言 キリスト教的社会思 霊性一般 イエズス会霊性 旧約聖書神学 諸宗教の神学 フェミニスト神学 信仰生活 セキュラリズム 修道生活 修道生活 サクラメントウム・ムン	
K・ラーナー 緒方貞子 M・E・ボアリング D・ランギス O・ケーラー E・ハンク	イエス・キリスト(Ⅵ) 〈巻頭言〉難民の保護 物語としてのキリスト論 ―マルコのキリスト理解― 喜び ―その聖書的、教父的理解― フランシスコ・ザビエル ―使命感に燃えたイエズス会の個人主義者― アウシュビッツ後のキリスト者	71 1991 102～112 72 1992 2～3 72 1992 4～24 72 1992 25～35 72 1992 36～55 72 1992 56～64	ディ 難民 マルコ 霊性一般 イエズス会霊性 現代と神学	ホセア

E・ショッケンホフ ブラザー・アンドルー L・A・シェーケル L・ブレンダン P・ネメシエギ J・J・プテンカラム 小高毅 J・アリソン R・L・マドックス S・J・ダフィー S・グライナー W・ヴォルベルト R・A・ヒル J・オーコンネル	人間の尊厳とその生物学的な自然本性 カリスマと委員会 「さからい」としての良心 —エレミヤ書からの聖書の考察— 天におけるごとく地にも(2) 人間の神学者(アンリ・ド・リュバク追悼) 難民問題の解説 — 私の存在の証明書— 〈巻頭言〉無知と学知 義化と意識の構造 実践的学びとしての神学の回復 心の闇(Ⅰ)—問い直される原罪— 祈りは必ずかなえられるのか？ 他人の体に対する権利？ —臓器移植の若干の問題について— 霊的指導者の守秘義務 愛の理論	72 1992 65～79 72 1992 80～82 72 1992 83～92 72 1992 93～101 72 1992 102～105 72 1992 106～111 73 1992 2～4 73 1992 5～19 73 1992 20～41 73 1992 42～56 73 1992 57～71 73 1992 72～88 73 1992 89～94 73 1992 95～103	生命倫理 福音宣教 旧約聖書神学 信仰生活 エッセイ エッセイ 巻頭言 パウロ神学 実践神学一般 原罪 祈り 生命倫理 霊的指導 霊性一般 サクラメントウム・ムン
J・B・メッツ 長島正 J・M・デ・メサ P・A・ファウルクス M・E・スカーフ J・デュピュイ S・J・ダフィー C・M・マルティニーニ S・ラヤン	政治神学 〈巻頭言〉待望される地球・家族・共同体の神学 キリストに従う道としての結婚 聖書における家庭のイメージ 家庭の神話とモデル キリスト論と諸宗教における救いの神学 心の闇(Ⅱ)—問い直される原罪— 聖書による祈り 地球は神のもの	73 1992 104～111 74 1993 2～5 74 1993 6～25 74 1993 26～36 74 1993 37～49 74 1993 50～61 74 1993 62～76 74 1993 77～85 74 1993 86～102	ディ エコロジー 婚姻 婚姻 婚姻 諸宗教の神学 原罪 祈り エコロジー サクラメントウム・ムン
J・ダーフィット 野村純一 R・A・マッコーマック U・ルー M・レナ R・ホートン M・A・マクファースン・オリヴァー L・シューマン H・テシエ	家庭 〈巻頭言〉福音宣教推進全国会議の神学 二十一世紀に臨む倫理神学 —変動の中の伝統— 新カテキズム テゼ 忍耐の神学 —燃えつき症候群を越えて— 夫婦の霊性 召し出しの霊的識別 —イグナチオ・デ・ロヨラの霊操にもとづく方法— イスラームから問われるキリスト者 —キリスト者によるイスラーム理解—	74 1993 103～111 75 1993 2～4 75 1993 5～18 75 1993 19～28 75 1993 29～41 75 1993 42～53 75 1993 54～69 75 1993 70～83 75 1993 84～103	ディ 福音宣教 倫理神学一般 カテキズム 霊性一般 現代と神学 霊性一般 イエズス会霊性 イスラーム教 サクラメントウム・ムン
K・ラーナー K・リーゼンフーバー A・ダレス H・フリース A・ペーター G・A・アーバックル M・アマラドス J・B・メッツ	神の普遍的救済意志 〈巻頭言〉神学的思惟の諸源泉 教会論一般の半世紀 受容 —教会における真理発見への信徒の貢献— バルトロメ・デ・ラス・カサス —解放の神学における回心の範型— 民族性・多文化主義・文化的受肉 解放 —諸宗教の協力をめざして— カール・ラーナー追惜	75 1993 104～111 76 1994 2～5 76 1994 6～28 76 1994 29～45 76 1994 46～58 76 1994 59～71 76 1994 72～93 76 1994 94～99	ディ 神学一般 教会論一般 教会論一般 解放の神学 インカルチュレーション 諸宗教の神学 エッセイ

総目録

K・ラーナー	一九九九年、イエズス会修練院にて	76	1994	100～101	エッセイ サクラメントウム・ムン
K・ラーナー	神の民・教会所属	76	1994	102～110	ディ
小田武彦	〈巻頭言〉分かち合いの前提となるもの	77	1994	2～5	巻頭言
W・カスパー	聖書と伝統 ―一つの聖霊論的展望―	77	1994	6～34	聖書と伝承
K・H・ヴェーガー	現代の神証明の構造	77	1994	35～44	基礎神学一般
W・キルヒシュレーガー	エウカリスチア ―共同体の祝祭としての感謝の祭儀―	77	1994	45～52	聖体
M・L・ブラン	霊的同伴の実践	77	1994	53～59	霊的指導
W・ランベルト	「霊操を与える者」 ―霊操における同伴者の役割―	77	1994	60～71	イエズス会霊性
A・ピエリス	アジアのキリスト	77	1994	72～85	アジアの神学
D・ミュレール	旅する者の祖国 ―移住の倫理のために―	77	1994	86～101	社会倫理 サクラメントウム・ムン
A・グリルマイアー	キリスト論	77	1994	102～113	ディ
白柳誠一	〈巻頭言〉センスス・エクレシエ	78	1995	2～3	巻頭言
A・ダレス	『霊操』の教会規定	78	1995	4～17	イエズス会霊性
P・レクリヴァン	改革者イグナチオ? ―『霊操』の教会規定の歴史的読解―	78	1995	18～31	イエズス会霊性
J・G・ゲルハルト	教会の感覚 ―イグナチオ・デ・ロヨラの教会性―	78	1995	32～45	イエズス会霊性
J・クレーマー	イエスの根本願望 ―イエスが本来望んだこと、今日も望んでいること―	78	1995	46～65	キリスト論
M・ジュリアーニ	霊の動き	78	1995	66～77	イエズス会霊性
E・コレット	ラーナー神学の哲学的基礎	78	1995	78～90	カール・ラーナー
J・B・メッツ	カール・ラーナー ―人間の神学的名誉のための闘い―	78	1995	91～102	カール・ラーナー サクラメントウム・ムン
K・ラーナー	神学	78	1995	103～115	ディ
濱尾文郎	〈巻頭言〉「時のしるし」を読みとる	79	1995	2～6	巻頭言
N・グライナツハー	新時代におけるカトリックの同一性	79	1995	7～18	教会論一般
A・クノックアールト	カトリック教会カテキズム	79	1995	19～33	カテキズム
E・ファイル	『新カテキズム』は信仰を正しく伝えうるか?	79	1995	34～50	カテキズム
R・ヘイト	今日に伝えるイエス	79	1995	51～74	キリスト論
J・W・オマリー	イグナチオは教会の改革者か?	79	1995	75～92	イエズス会霊性
J・バーナーディン	司祭 ―秘義の担い手・魂の医者―	79	1995	93～103	司祭職
M・L・グーブラー	私は道・真理・命	79	1995	104～113	新約聖書神学
K・ベルガー	聖書釈義学と組織神学	79	1995	114～125	聖書釈義学 サクラメントウム・ムン
F・ケルスティエンス	希望	79	1995	126～135	ディ
田邊堇	〈巻頭言〉観想への招き	80	1996	2～5	霊性神学
W・バイネルト	大学神学部と教会	80	1996	6～24	神学教育
M・デルガド	岐路に立つヨーロッパ神学	80	1996	25～38	インカルチュレーショ
K・ブラーゼル	多文化的キリスト教・解放のための構想	80	1996	39～55	インカルチュレーショ
V・ティリマンナ	国家主権と人道的介入	80	1996	56～71	社会倫理
E・グシキンデ	イエスとサマリア人 ―対話の類型―	80	1996	72～77	福音宣教
J・W・オマリー	ミッションと初期イエズス会員	80	1996	78～86	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	霊操におけるスーパーバイザーとは	80	1996	87～92	イエズス会霊性
J・R・サックス	イグナチオのミスティシズム	80	1996	93～103	イエズス会霊性

総目録

K・ラーナー	教導職	80	1996	104～117	サクラメントウム・ムン ディ
徳善義和	〈巻頭言〉現代の教会への共通の問い —ルター没後四五〇年に「九十五箇	81	1996	2～6	巻頭言
M・ズイーヴェルニヒ	条」を読む—	81	1996	7～21	福音宣教
M・ゼックラー	宣教の方向転換 —宣教の歴史的実績と将来の課題—	81	1996	22～41	エキュメニズム
A・ピエリス	信教の自由と寛容	81	1996	42～51	諸宗教の神学
J・レーザー	諸宗教間対話と諸宗教の神学 —アジアのパラダイム—	81	1996	52～57	エキュメニズム
V・P・ファーニッシュ	「ルター之年」とエキュメニズム	81	1996	58～68	パウロ神学
L・ボフ	パウロを位置づける —よりよい理解に向けて—	81	1996	69～79	解放の神学
J・ライター	解放の神学とエコロジー —分立か互恵か？—	81	1996	80～88	生命倫理
P＝H・コルベンバッハ	遺伝子治療と倫理	81	1996	89～95	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	イエズス会員の派遣と信徒との協力	81	1996	96～102	イエズス会霊性
	《連載・イグナチオの霊操 第二回》「第一週」の経験の中でのキリスト	81	1996	103～115	サクラメントウム・ムン ディ
P・マインホルト	プロテスタンティズム	82	1997	2～5	自然科学と神学
青木清	〈巻頭言〉科学と宗教の対話への期待	82	1997	6～18	回勅
R・A・マッコミック	回勅『いのちの福音』を読む	82	1997	19～33	回勅
J・フックス	「いのちの福音」と死の文化	82	1997	34～48	倫理神学一般
R・A・マッコミック	正・不正から善・悪へ —識別は倫理的問題に何を寄与するか—	82	1997	49～63	カテキズム
N・グライナッハー	教化か、初歩要理教育か？ —『新カテキズム』についての意見—	82	1997	64～72	エコロジー
R・ジベリーニ	エコロジーに関する神学論争	82	1997	73～88	旧約聖書神学
E・ツェンガー	我々の第一の契約 —キリスト者にとっての旧約聖書の重要性—	82	1997	89～94	バラスリヤ師関連
タブレット誌	アジアの神学者が異端者として宣告され破門された	82	1997	95～96	バラスリヤ師関連
アーヘン・ミッシオ宣教学研究	バラスリヤ師の破門に関する声明書	82	1997	97～98	バラスリヤ師関連
S・パイナダス	バラスリヤの事件	82	1997	99～107	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第三回》霊操「第一週」の終わりの霊操者の霊的状	82	1997	108～115	サクラメントウム・ムン ディ
M＝J・ギュー	教会論一般	83	1997	2～6	修道生活
高橋重幸	〈巻頭言〉「沖に漕ぎ出して網を降ろしなさい」	83	1997	7～13	回勅
R・マックダーモット	奉献生活 —起源二千年に向けての召命—	83	1997	14～21	修道生活
J・ズートブラック	イエスの弟子であることと修道生活	83	1997	22～29	修道生活
M・ティッド	修練期の回想 —二十世紀末の修練期を振り返って—	83	1997	30～39	修道生活
M・アンチラ	教会公文書における修道者の従順	83	1997	40～51	教会論一般
A・ダレス	信仰の教会的次元	83	1997	52～70	エキュメニズム
O＝H・ペッシュ	トリエント公会議と今日のエキュメニカル対話 —カトリックからの展望—	83	1997	71～84	婚姻
P・M・ツレーナー	再婚	83	1997	85～89	イエズス会霊性
M・ジュリアーニ	《連載・イグナチオの霊操 第四回》霊操 ひとたび霊操が達成されると	83	1997	90～114	サクラメントウム・ムン ディ
M＝J・ギュー	教会	84	1998	2～5	キリスト論
J・ネラン	〈巻頭言〉現代におけるキリスト論とは	84	1998	6～28	諸宗教の神学
R・ヘイト	イエスと世界の諸宗教	84	1998	29～56	キリスト論
P・C・ファン	イエス —アジア人の顔をした救い主—	84	1998	57～65	キリスト論
J・マッカーシー	宇宙的キリストとエコロジー				

総目録

A・ラフォ ヘルダー・コレスポンデンツ誌 T・ローシュ	ホアン・ルイス・セグンドの「神学の深みとしての霊性」 決定的な歩み ―義化の教説に関するルーテル並びにカトリック教会の宣言 明日の教会の司祭職	84 1998 66～68 84 1998 69～81 84 1998 82～98	霊性神学 エキュメニズム 司祭職 サクラメントウム・ムン
K・ラーナー 吉山登 教皇庁立生命アカデミー E・D・ペレグリーノ C・クンマー D・ミート	恩恵 〈巻頭言〉生命倫理と社会倫理のかかわり ヒト・ゲノムの研究と倫理 安楽死と介助自殺 子宮外墮胎？ ―胚の生命の始まりを決定する際の実証的証拠― 「市場」と人間の尊厳の不可侵性 ―生体臨床医学を例として― アジアにおけるインカルチュレーションの歩み ―アジア司教協議会連盟の二 十五年間（一九七〇～九五）― 普遍的な墮罪状態 ―原罪概念に代わる類語― 詩編とキリスト教の黙想 ―詩編を理解するための最終編集の意義― 修辞分析 ―聖書理解の新しい研究方法― バラスリア師破門の撤回	84 1998 99～119 85 1998 2～8 85 1998 9～15 85 1998 16～31 85 1998 32～38 85 1998 39～46	ディ 生命倫理 生命倫理 生命倫理 生命倫理 生命倫理 インカルチュレーショ ン 原罪 詩編 聖書釈義学 バラスリヤ師関連 サクラメントウム・ムン
S・ベヴァンズ G・クラウド N・ローフィンク R・メネ タブレット誌	聖霊 〈巻頭言〉上川島からの声と日本の殉教者 神の国 ―アジアにとって神学的シンボルか？― 宗教における救いのイメージ アジアへの宣教 キリスト教の絶対性の主張について イエスのイメージ ―呼称によるキリスト論の再活用― 霊性に伴う「危険」 貧しさについての三様の語り方 ―詩編一〇九をヒントに―	85 1998 47～66 85 1998 67～75 85 1998 77～88 85 1998 89～105 85 1998 106	ディ 殉教者 神の国 諸宗教の神学 福音宣教 教義 キリスト論 霊性神学 詩編 サクラメントウム・ムン
M・シュマウス 結城了悟 P・C・ファン H・ヴァルデンフェルス 金 壽煥（キム・スファン） K・ラーナー G・オコリンズ J・M・カスティリョ N・ローフィンク	救済史（一） 〈巻頭言〉二十一世紀に向かう教会 ローマ・カトリック教会と教皇職 不謬性 信仰を守るために？ ―教義学者の反問― 教会における公正と現代の法制度 宗教の差異 ―聖なるものの多元性における信仰― ユダヤ人イエス ―異邦人の救い主か、イスラエルのメシアか？― 医学研究の必要性和限界 男性の霊性 栄光のうちに、主よ、あなたが来られるまで 聖公会との対話に新たな障害	85 1998 107～119 86 1999 2～5 86 1999 6～25 86 1999 26～35 86 1999 36～44 86 1999 45～58 86 1999 59～79 86 1999 80～85 86 1999 86～102	ディ 巻頭言 教導職 教導職 教義 教導職 諸宗教の神学 キリスト論 倫理神学一般 霊性神学 終末論 エキュメニズム サクラメントウム・ムン
K・ベルガー 山本襄治 W・クラウドニッツァー H・ヴァルデンフェルス P・ヒューナーマン L・エルシー H＝J・サンダー H・ヘーグスタド E・ショッケンホフ D・ビゾン M・ケール F・A・サリバン	救済史（二） 〈巻頭言〉新しい時代の新しい典礼？ 「義認の教義についての共同宣言」	86 1999 103～111 87 1999 2～3 87 1999 4～11 87 1999 12～23 87 1999 24～33 87 1999 34～45 87 1999 46～62 87 1999 63～71 87 1999 72～85 87 1999 86～95 87 1999 96～101 87 1999 102～105	ディ 典礼一般 エキュメニズム
A・ダルラプ 國井健宏 W・パネンベルク		87 1999 106～113 88 2000 2～4 88 2000 6～9	ディ エキュメニズム

総目録

E・ユンゲル	枢要な問題 —義認の教義についての共同宣言—	88	2000	10～17	エキュメニズム
W・カスパー	教会一致への途上における里程標 —義認の教義についての共同宣言—	88	2000	18～21	エキュメニズム
K・レーマン	どのような「コンセンサス」に到達したのか —義認の教義についての共同宣言—	88	2000	22～28	エキュメニズム
F・クーン	司牧職間の協力 —はざまに漂いながら—	88	2000	29～36	司牧
R・マッケンナ	教会の宣教使命 —G・バウムの思想分析—	88	2000	37～53	福音宣教
R・ウィークランド	地球規模化する世界、多文化の教会	88	2000	54～67	教会論一般
J・H・マッケンナ	幼児洗礼の神学的考察	88	2000	68～79	洗礼
P＝H・コルベンバッハ	現代に挑戦するカトリック教育 —ポーランドでのイエズス会学校の課題—	88	2000	80～86	イエズス会霊性
W・ベッケンフェルデ	ドイツ・カトリック教会の現状 —教会法学者の目から—	88	2000	87～105	教会法
C・R・カバルス	意識の糾明	88	2000	106～115	イエズス会霊性
柳瀬睦男	〈巻頭言〉自然にあらわれた神の栄光	89	2000	2～3	自然科学と神学
G・コイン	宇宙 —自然科学の理解とその神学的意味—	89	2000	4～11	自然科学と神学
R・コルターマン	進化現象における選択の意味と役割	89	2000	12～20	自然科学と神学
J・モルトマン	霊の賜物とそのキリスト教的同一性	89	2000	21～26	聖霊
T・F・オメアラ	ターザン、ラス・カサス、ラーナー —トマス・アクウィナスの拡大された恩恵の理論—	89	2000	27～40	恩恵論
N・A・ダラヴェール	カトリック・フェミニスト神学を目指して	89	2000	41～60	フェミニスト神学
E・フックス	倫理神学の半世紀	89	2000	61～68	倫理神学一般
R・ノイデッカー	ラビ・ユダヤ教と福音書に見られる師弟関係	89	2000	69～81	ユダヤ教
H・S＝シュトラウマン	「罪は女から始まり…」(シラ書25章24節)	89	2000	82～97	フェミニスト神学
C・R・カバルス	信徒のものであるイグナチオの霊性 —「イグナチオ的あり方」とは—	89	2000	98～111	イエズス会霊性
岩島忠彦	〈巻頭言〉カトリック神学のゆくえ	90	2001	2～3	宗教教育
教皇庁立生命アカデミー	ヒト胚性幹細胞の作成および科学的・治癒的用途に関する宣言	90	2001	4～11	生命倫理
J・B・メッツ	神と時 —モデルネの境域における神学と形而上学—	90	2001	12～28	基礎神学一般
A・ニコラス	キリスト教の脱西洋化 —不幸か、新たなチャンスか—	90	2001	29～45	福音宣教
G・ポツカルスキー	東西教会の分断と再合同	90	2001	46～62	エキュメニズム
L・ロース	芸術の象徴表現、文化、宗教的なもの	90	2001	63～74	典礼一般
N・ローフィンク	貧しい人は地を継ぐ —詩編37と真福八端—	90	2001	75～88	旧約聖書神学
C・M・マルティニーニ	教皇ヨハネ・パウロ二世の聖地巡礼 —和解—	90	2001	89～97	神学的エッセイ
『アメリカ』誌	教会における法の適正手続き	90	2001	98～100	教導職
C・R・カバルス	現代社会における二つの霊の動き	90	2001	101～116	霊性神学 sacramentum・ムン
J・モラー／A・サンド	人間(1)	90	2001	117～125	ディ
越前喜六	〈巻頭言〉なぜ教会は学問に力をいれるべきか	91	2001	2～4	巻頭言
W・カスパー	普遍教会と地方教会との関係	91	2001	5～17	教会論一般
P・C・ファン	解放の神学の方法	91	2001	18～39	解放の神学
H・クラマー	結婚、忠実、離婚エトスの変化	91	2001	40～54	婚姻
J・ピタウ	キリスト教信仰とカトリック教育の四つのアイコン	91	2001	55～60	神学的エッセイ
J・コモンチャク	「事件」としての第二バチカン公会議	91	2001	61～84	教会論一般
W・フルスト	バーチャル・リアリティーと秘跡	91	2001	85～96	秘跡論一般
B・グロム	「エソテリック」の魅惑	91	2001	97～109	神秘主義
D・J・フィッツパトリック	親としての霊性	91	2001	110～115	霊性一般

総目録

K・ラーナー	人間(2)
朴憲郁	〈巻頭言〉二十一世紀とパウロの終末論的希望
O・ラッシュ	信仰のセンス ―啓示理解の信仰―
G・メイシー	中世初期における女性の叙階
D・グッド	新約聖書と同性愛
M・ウェレット	三位一体と主の晩餐 ―契約の神秘―
コンキリウム誌	米国同時多発テロ事件に対する宣言
N・ローフィンク	旧約聖書とキリスト者の日常生活
H・M＝ケラー	ルカ福音書のマリア
S・キーヒレ	私に従って十字架を
岡田武夫	〈巻頭言〉現代日本の教会のための神学的課題
J・ソプリノ	犠牲者によるグローバル化の贖い
E・ツェンガー	聖書の創造神学
J・P・マイヤー	史的イエスとキリスト教奉仕職 ―その歴史的つながりはあるか？―
E・T・グロッペ	イヴ・コンガールの聖霊の神学
C＝T・ライ	アジアの神学における宗教間対話
M・G・ローラー	変わりゆく結婚モデル
C・ドーマン	神学が祈りにとりいれられるとき(詩編103)
B・ファイニンガー	学校での聖書教育
J・ラッツィンガー	地方教会と普遍教会
手塚奈々子	〈巻頭言〉教父と現代
J・モルトマン	神の義認
H＝J・レーリク	「神化」―救済論のエキュメニカルなキーワード―
P・ヘンリッヒ	原理主義とは何か
J＝L・マリオン	エマオへの道における霊的直観
E・ジョンソン	神の友、預言者であるマリア ―マリア伝承の読み方―
L＝M・ショーベ	終末論と秘跡
J・ノイナー	啓示の豊かさ ―『ドミヌス・イエズス』についての考察―
S・フレイン	ガリラヤとエルサレム ―ユダヤ復興の地理学的視点から―
教皇庁立生命アカデミー	クローニングに関する考察
小野寺功	〈巻頭言〉京都学派とキリスト教
W・カスパー	エキュメニズムの現状と将来
J・F・キーナン	倫理神学とその歴史
C・ベル	儀礼にまつわる歴史 ―部族儀礼とカトリック儀礼―
	キリスト教聖書の中のユダヤの民とその聖書 ―教皇庁聖書委員会発表の新
	文書―
J・ボイトラー	聖別のないミサ？
R・F・タフト	女性助祭をめぐる議論の現況
P・サガノ	平和のための宗教
M・アマラドス	イエス・キリスト ―犠牲者と行為者の世界における神の義―
J・モルトマン	第四世界からの神学と霊性(前編) ―探し求めて出かける―
T・カタラ	〈巻頭言〉イエスの絶叫
大貫 隆	

			サクラメントウム・ムン
91	2001	116～123	ディ
92	2002	2～4	終末論
92	2002	5～31	啓示
92	2002	32～53	叙階
92	2002	54～71	性的マイノリティー
92	2002	72～93	三位一体
92	2002	94～97	社会倫理
92	2002	98～114	旧約聖書神学
92	2002	115～130	ルカ
92	2002	131～135	霊性一般
93	2002	2～3	日本の神学
93	2002	4～20	解放の神学
93	2002	21～40	旧約聖書神学
93	2002	41～62	キリスト論
93	2002	63～84	聖霊
93	2002	85～94	諸宗教の神学
93	2002	95～100	婚姻
93	2002	101～111	詩編
93	2002	112～123	宗教教育
93	2002	124～133	教会論一般
94	2003	2～3	巻頭言
94	2003	4～13	教父学
94	2003	14～34	救済論
94	2003	35～46	現代と神学
94	2003	47～57	現代と神学
94	2003	58～71	マリア論
94	2003	72～84	終末論
94	2003	85～93	啓示
94	2003	94～112	新約聖書神学
94	2003	113～121	生命倫理
95	2003	2～4	哲学と神学
95	2003	5～23	エキュメニズム
95	2003	24～42	倫理神学一般
95	2003	43～59	典礼
95	2003	60～74	聖書神学一般
95	2003	75～81	聖体
95	2003	82～89	叙階
95	2003	90～95	アジアの神学
95	2003	96～114	救済論
95	2003	115～129	霊性神学
96	2004	2～3	キリスト論

総目録

神学ダイジェスト編集委員会	第二バチカン公会議四十周年 —A・ダレスとJ・オマリーの小論を読む—	96	2004 4～22	教会論一般
L・S・ケイヒル	グローバルな倫理に向けて	96	2004 23～45	倫理神学一般
J・P・マイヤー	死者の復活についての論争	96	2004 46～65	新約聖書神学
E・M・ファールベル	一つの始まりである終わり —キリスト教から見たリインカルネーション—	96	2004 66～84	終末論
D・J・シモン	スキレベークスの救済論 —終末的救いと社会的政治的解放—	96	2004 85～113	終末論
T・カタラ	第四世界からの神学と霊性(後編) —探し求めて出かける—	96	2004 114～128	霊性神学
カトリック信者の諸権利協会	カトリック教会会憲(ARCC試案)	96	2004 129～141	信仰生活
イオアン高橋保行	〈巻頭言〉現代とエキュメニズムと正教	97	2004 2～4	エキュメニズム
C・スタモウリス	エキュメニズムの教会論と三位一体の交わり	97	2004 5～17	エキュメニズム
J・Y・タン	アジア特別シノドス「提題解説」に対する日本とインドネシアの公式回答	97	2004 18～34	アジアの教会
P・C・ファン	宗教上の多重帰属	97	2004 36～57	アジアの神学
A・ピエリス	教会はアジア的すぎるか —N・タナーに答えて—	97	2004 58～69	アジアの教会
E・ツェンガー	男と女として造られた人間 —創世記2～3章を読む—	97	2004 71～76	創世記
J・マナス	セクシュアリティ、独身制、信仰の探求	97	2004 77～92	婚姻
G・コールマン	同性結合と結婚	97	2004 93～104	性的マイノリティー
J・セルヴェ	受肉におけるマリアの役割	97	2004 106～123	マリア論
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (前編)	97	2004 124～133	典礼史
稲垣 良典	〈巻頭言〉「神学すること」について考える	98	2005 2～4	巻頭言
K・アングレート	政治的問題としての一神論 —キリスト教的終末論から考える—	98	2005 5～22	神概念
K・R・ハイメス	正戦と軍事介入	98	2005 23～35	戦争
J・フレデリックス	カトリック教会と他宗教 —真実で尊いものを何も排除しない—	98	2005 36～60	諸宗教の神学
T・シュナイダー	共同聖餐への道? —カトリック的視点からの検討—	98	2005 61～82	エキュメニズム
S・ヘル	ルーテルとの共同聖餐 —見通しと限界、カトリックからの提言—	98	2005 83～96	エキュメニズム
H・フランケメレ	「聖書」神学とは? —意味論的・史的考察—	98	2005 97～114	新約聖書神学
P=H・コルベンバツハ	霊操と協働者たち	98	2005 115～121	霊的指導
R・ハメル、M・パニコラ	生命維持は義務か? —伝統的教説とその修正について—	98	2005 122～131	生命倫理
S・マリーニ	歴史としての賛美歌 —賛美歌に見るアメリカ初期福音主義— (後編)	98	2005 132～143	典礼史
梶山 義夫	〈巻頭言〉職員室の中で近頃思うこと	99	2005 2～5	宗教教育
S・ミーディマ、W・L・ウォーデッカー	ミッションスクールのアイデンティティーと生徒のアイデンティティー形成	99	2005 6～19	宗教教育
T・H・グルーム	総合的信仰教育	99	2005 20～30	宗教教育
	修道会による学校への支援(スポンサーシップ) —カトリック学校の伝統を守るために—	99	2005 31～50	宗教教育
F・C・ミュラー	「塔のある町を建てよう…」	99	2005 51～60	創世記
C・ウーリンガー	人は何によって倫理的に善とされるか —J・フックスによる倫理的善と救いに関する考察—	99	2005 61～81	倫理神学一般
M・E・グラハム	恩恵の神学	99	2005 82～97	恩恵論
J・マッタム	全体的(ホーリスティック)な霊性の土台としての創造信仰	99	2005 98～114	霊性神学
G・アウグスティン	日常における神認識の場とは?	99	2005 115～124	神体験
E・クンツ	キリスト教の霊性の中心	99	2005 125～135	霊性神学
H・M・カスティーリョ	〈巻頭言〉神学ダイジェスト100号記念によせて	100	2006 2～4	巻頭言
佐久間 勤	神学ダイジェスト100号に添えて	100	2006 5～7	巻頭言
光延 一郎	—カトリック神学者の経験	100	2006 8～23	カール・ラーナー
K・ラーナー	カール・ラーナーの神学と日本	100	2006 24～38	カール・ラーナー

総目録

K・レーマン	教会にとってのカール・ラーナーの意義	100	2006 39～54	カール・ラーナー
K・P・フィッシャー	『教会の構造改革』再読	100	2006 55～73	カール・ラーナー
C・ケッペラー	カール・ラーナー恩恵論の核心 —アンリ・ド・リュバックとの対比において—	100	2006 74～96	カール・ラーナー
R・A・ジーベンロック	カール・ラーナー資料室での経験	100	2006 97～109	カール・ラーナー
J・ソプリノ	ラテン・アメリカから見たカール・ラーナー	100	2006 110～128	カール・ラーナー
P・エンディーン	英語圏におけるカール・ラーナー	100	2006 129～150	カール・ラーナー
A・ラフェルト	カール・ラーナー研究のために	100	2006 151～158	カール・ラーナー
濱尾 文郎	〈巻頭言〉第二バチカン公会議後の教会と現状の要望	101	2006 2～7	第二バチカン公会議
J・W・オマリー	第二バチカン公会議 —伝統との非連続性—	101	2006 8～34	第二バチカン公会議
A・ダレス	『教会憲章』の秘跡的教会論	101	2006 35～49	教会憲章
H・フランケメレ	『啓示憲章』の進歩と停滞	101	2006 50～57	啓示憲章
J・マケヴォイ	『現代世界憲章』の意義	101	2006 58～77	現代世界憲章
C・テオバルト	第二バチカン公会議文書の内的原則と今日的課題	101	2006 78～101	第二バチカン公会議
F・A・サリバン	司教協議会に教導権はあるのか 今日における霊操の教会規定 —公会議後の教会において考え、判断し、感じるための諸規則—	101	2006 102～121	教導職
P=H・コルベンバッハ	〈巻頭言〉至高の福音のささやかな理解と実現のために	101	2006 122～131	イエズス会霊性
西山 俊彦	現代の挑戦と教会の人間性回復	102	2007 2～7	霊性神学
J・A・エストラダ	アジアにおけるキリスト教の危機	102	2007 8～21	霊性神学
A・ニコラス	状況(コンテキスト)に根差した普遍性に向けて —台湾基督長老教会の神学と実践—	102	2007 22～30	霊性神学
陳 南州	社会使徒職とその霊性 —イエズス会の取り組み—	102	2007 31～51	霊性神学
J=Y・カルヴェ	歴史の中の霊性 —社会的観点から—	102	2007 52～61	イエズス会霊性
P・シェルドレイク	復活をどのように考えるのか？	102	2007 62～74	霊性神学
H・ケスラー	政治的抵抗者としてのイエスの想起 —旅の途上のキリスト論(ルカ24章13～35節)—	102	2007 75～84	キリスト論
C・ヤンセン	多宗教社会における聖書解釈 —パウロの「回心」の再読を例に—	102	2007 85～92	新約聖書神学
R・S・スギルタラージャ	B・ロナーガンの教会への奉仕について	102	2007 93～105	聖書釈義学
C・M・マルティニー	日本におけるカトリック学校の課題	102	2007 106～120	ロナガン
小田 武彦	今日の大学における神学研究	103	2007 2～12	巻頭言
F・ウィルフレッド	カトリック大学における神学	103	2007 13～22	カトリック学校
J・R・コノリー	岐路に立つ米国のカトリック学校	103	2007 23～39	カトリック学校
M・T・ハリナン	カトリック学校への提言	103	2007 40～63	カトリック学校
J・J・ディジャコモ	大バシレイオスの聖霊論	103	2007 64～70	カトリック学校
A・ライダー	ハンス・ウルス・フォン・バルタザールとそのイグナチオ的—教父的源泉	103	2007 71～81	聖霊
W・レーザー	健康と医学の神学に向けて	103	2007 82～91	バルタザール
S・v・アーブ	霊的旅路での聖書の役割	103	2007 92～101	現代神学
M・ノイマン	イエスの悪魔祓いをめぐる論争	103	2007 102～111	霊的指導
M・エープナー	トリエントのミサを認める自発教令	103	2007 112～119	新約聖書神学
M・フランシス	〈巻頭言〉いのちへの覚醒	103	2007 120～125	回勅
竹内 修一	カトリック倫理神学における伝統論	104	2008 2～5	生命倫理
B・V・ジョンストン	性と倫理神学をめぐる議論	104	2008 6～23	生命倫理
J・F・キーナン	『フマーネ・ヴィテ』再読	104	2008 24～40	生命倫理
J・M・マクダーモット		104	2008 41～66	生命倫理

総目録

T・A・サルズマン、M・G・ローラー	真に人間的な性における性的補完性	104	2008 67～89	生命倫理
J・シェッファ	環境倫理のための神学的枠組み	104	2008 90～110	環境倫理
J・F・キーナン	司祭の倫理的権利の構築を目指して	104	2008 111～124	司祭職
宮本 久雄	〈巻頭言〉ナザレのイエス	105	2008 2～6	巻頭言
W・レーザー	『ナザレのイエス』への十二の手引き	105	2008 8～25	回勅
T・ゼーディング	—聖書学者の応答	105	2008 26～37	回勅
P・スタインフェルズ	神の御顔たるイエス	105	2008 38～42	回勅
T・W・ティレイ	新たなイエス研究 —史的イエスでなく、歴史上のイエスを—	105	2008 43～69	新約聖書神学
D・ベラー	シオンの娘マリア —聖書の中のイエスの母—	105	2008 70～82	マリア論
	「キリストの教会はカトリック教会の中に存在する」 —『教会憲章』第8項をめ			
K・レーマン	ぐるカトリック教会の自己理解—	105	2008 83～95	教会論
M・カイザー	離婚して再婚した信徒の秘跡受領	105	2008 96～106	婚姻
C・M・マルティーニ	ポストモダン世界の信仰教育	105	2008 107～112	宗教教育
K・フェヒテル	今日の司祭養成のために —イグナチオの司祭像—	105	2008 113～125	司祭職
朴 憲郁	〈巻頭言〉使徒パウロの使信から聞き分ける	106	2009 2～4	パウロ神学
D・M・ノイハウス	パウロを再発見する —パラダイム変化の試み—	106	2009 5～21	パウロ神学
N・パウメルト	新しいパウロ観	106	2009 22～48	パウロ神学
G・キーレンケリイ	信仰による義認	106	2009 49～59	パウロ神学
H＝J・クラウク	キリストの体 —I コリント書10～12章における主の晩餐—	106	2009 60～70	パウロ神学
F・ゴンサルヴェス	キリストと共に十字架にかかる	106	2009 71～78	パウロ神学
P・ヒューナーマン	ナザレのイエスとは誰か？ —我らの友、キリスト・イエス—	106	2009 79～90	キリスト論
W・ジョンストン	宗教者は平和をもたらすことができるのか	106	2009 91～102	諸宗教の神学
D・M・ナイト	「み心の信心」の再生に向けて	106	2009 103～109	信仰生活
梅村昌弘	〈巻頭言〉『ミサ典礼書』の改訂	107	2009 2～7	ミサ
G・ダニールズ	第二バチカン公会議四十年後の典礼 —後退か、絶頂か—	107	2009 8～29	典礼一般
J・F・ボルドヴィン	典礼史の用い方の数々	107	2009 30～46	典礼史
R・F・タフト	イエズス会の典礼の課題	107	2009 47～68	典礼一般
A・T・ケイルガ	復活と葬儀典礼	107	2009 69～80	典礼神学
具 正謨	四旬節 —過越祭儀と入信の秘跡の準備—	107	2009 81～89	典礼一般
I・イエスダサン	四旬節の精神	107	2009 90～98	典礼一般
E・S・ゲルステンベルガー	神はいずこにおられるのか —詩編作者の叫び—	107	2009 99～114	詩編
具 正謨	新『ミサ典礼書』日本語訳について	107	2009 115～117	ミサ
幸田和生	〈巻頭言〉司祭が司祭であることの意味	108	2010 2～7	司祭職
K・ラーナー	回心	108	2010 8～17	ゆるし
J・フックス	罪と回心	108	2010 18～31	罪
具 正謨	回心理論と現代神学	108	2010 32～44	ゆるし
B・ロナーガン	神学の土台としての回心	108	2010 45～54	ゆるし
J＝M・ローラン	司祭養成の考察(1) —感情における問題点—	108	2010 55～67	司祭職
G・クッチ/H・ゾルナー	司祭養成における心理学の貢献	108	2010 68～76	司祭職
L・コフラー	まず、あなた自身を癒しなさい	108	2010 77～80	司祭職
R・ストレンジ	叙階 —我が道ではなく、イエスの道を—	108	2010 81～84	司祭職
R・コルターマン	進化と創造	108	2010 85～100	自然科学と神学
J・シュミット	進化と創造信仰	108	2010 101～117	自然科学と神学

総目録

理辺良 保行	〈巻頭言〉「時のしるし」としてのエコロジカル・クライシス	109	2010 2～3	エコロジーの神学
A・C・アギレ	エコロジーの神学 ―認識論的アプローチ―	109	2010 4～16	エコロジーの神学
F・ウィルフレッド	諸宗教によるエコロジーの神学に向けて	109	2010 17～30	エコロジーの神学
N・ダーラー	地球の霊性と禁欲の神学	109	2010 31～41	エコロジーの神学
フランススコ会(小さき兄弟会)「正義と平和	エコロジカルな回心と環境正義 ―実践のための手引き―	109	2010 42～49	エコロジーの神学
R・イルクナー	「我々の同意において我々は罪を犯す ―罪の神学のアウグスティヌスの範	109	2010 50～61	罪
M=L・グーブラー	型をめぐる―	109	2010 62～73	復活
C・W・トロール	イエスの復活 ―神の国の告知としての復活信仰―	109	2010 74～89	イスラム教
J=M・ローラン	キリスト教徒とイスラム教徒の共同の祈り	109	2010 90～102	司祭職
K・F・ペクラーズ	司祭養成についての考察(二) ―感情と霊的生活―	109	2010 103～108	現代世界と信仰
岩島 忠彦	信仰を伝えるために	110	2011 2～19	キリスト論
T・G・ワイナンディ	〈巻頭論文〉今日におけるキリスト論 ―その諸傾向と課題―	110	2011 20～37	キリスト論
E・ツェンガー	カルケドン公会議 ―キリスト論の現代的諸問題―	110	2011 38～49	ユダヤ教とキリスト教
J・グラナドス	ユダヤ教の視点におけるキリスト教の神論 ―いまだかつて、神を見た者はい	110	2011 50～62	キリスト論
M・アマラドス	ない(ヨハネ1・18)―	110	2011 63～77	世俗主義
H・シェンドルフ	マリアの記憶がキリスト理解に果たす役割	110	2011 78～97	哲学と神学
T・シェルトル	世俗主義に対する宗教の答え	110	2011 98～114	基礎神学
J=M・ローラン	哲学と神学 ―様々な姿を示す関係性―	110	2011 115～128	司祭職
カトリック教育聖省	基礎神学の位置確認 ―ポストリベラル神学を背景に―	110	2011 129～137	カトリック学校
川中 なほ子	司祭養成についての考察(三) ―二つの識別―	111	2011 2～14	ニューマン
J・H・ニューマン	カトリック学校における教育の宗教的次元 ―評価と刷新のためのガイドライ	111	2011 15～24	ニューマン
J・H・ニューマン	〈巻頭論文〉ニューマン枢機卿の紋章「心が心に語りかける」	111	2011 25～40	ニューマン
J・H・ニューマン	成義論	111	2011 41～49	ニューマン
J・H・ニューマン	教会の三職	111	2011 50～63	ニューマン
J・H・ニューマン	『平明教区説教集』	111	2011 64～86	ニューマン
J・H・ニューマン	理性との関係から見る信仰の本性	111	2011 87～114	ニューマン
J・H・ニューマン	キリスト教教理発展論	111	2011 115～123	ニューマン
J・H・ニューマン	同意の法則	111	2011 124～133	カトリック学校
P・ミルワード	〈特別寄稿〉ニューマン枢機卿の列福	111	2011 134	ニューマン
カトリック教育聖省	カトリック学校における教育の宗教的次元 ―評価と刷新のためのガイドライ	112	2012 2～3	苦難
神学ダイジェスト編集委員会	ン―(第二回)	112	2012 4～8	苦難
日本聖公会(訳)	J・H・ニューマン主要文献(邦語)	112	2012 9～19	苦難
菅原 裕二	東日本大震災のための祈り	112	2012 20～22	シュペーマン
R・シュペーマン	災害を前にして	112	2012 23～26	苦難
山脇 直司	東日本大震災と原発をめぐるドイツ人哲学者との対話	112	2012 27～32	苦難
W・グリム	〈解説〉ローベルト・シュペーマンの人と思想	112	2012 33～44	苦難
ザ・ワード・アマンダ・アス	東日本大震災一年を迎えて	112	2012 45～57	苦難
A・エルヴィー	なぜ善人に悪いことが起こるのか ―ヨブ記に見る苦しみの神秘―	112	2012 58～61	苦難
E・クンツ	灰と塵のエコロジー神学	112	2012 62～67	苦難
J・ホール	神の全能を語ることは今日なお意味があるか?	112	2012 68～78	苦難
B・ロナーガン	神の愛から私たちを引き離すことはできない			
宮本 久雄	み心の信心 ―主イエスと無原罪のマリアに―			
	プロメテウスの火か、聖霊の火か			

総目録

日本カトリック司教団 姜 禹一	いますぐ原発の廃止を —福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして 済州島ガンジェオン村に始まるアジア平和 カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドラ イン—(第三回) 〈巻頭言〉第二バチカン公会議を支えた神学者たち 教会の三位一体的基盤 神の母性と聖霊の女性性について すべての信者の教導権 —新約聖書の構造より— 信仰、希望、愛 すべての霊性の規範としての福音 「わたしの記念としてこれを行いなさい」 ヨブの四つの顔 護教論と神学 第二バチカン公会議の背景と軌跡 カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドラ イン—(第四回) 〈巻頭言〉上智大学創立百周年の歴史を未来につなぐもの イエズス会の教育とイグナチオ的教育法 キリシタン時代のイエズス会教育 —ザビエルの宿願「都に大学を」— 対話的宣教とイエズス会の教育 —南米と日本での宣教を比較した考察— 希望の学校「信仰と喜び」 —チャドとハイチでの実践— 世界を教室に 東チモールの聖イグナチオ学院 教育に携わる修道者とカトリック校の学生に向けて カトリック教育に関するバチカン公文書 —公文書解説・日曜日の教育学— カトリック学校における教育の宗教的次元 —評価と刷新のためのガイドラ イン—(第五回/最終回) 神の言葉と聖画像の関係性 聖ルカからの手紙 ベネディクト十六世の謙遜 —求められるローマの謙遜— 見過ごされた愛の教え 暗い日々から春へ 跪く権威 〈巻頭言〉信仰を生きる 信仰と神学 —『正教神学概論』(第一回)— 二つの—神教と三位一体 —『正教神学概論』(第一回)— 交わりのうちに 神に向かい、神と語り合う —霊操による対話— イエスと出会うために —霊操に於ける「場所の設定」— 新時代の宗教的成長のために 魂の救い 司教の団体性における「時のしるし」の識別 —第二バチカン公会議の未知な る体験—	112 2012 79～85 苦難 112 2012 86～92 苦難 112 2012 93～102 カトリック学校 113 2012 2～4 第二バチカン公会議 113 2012 5～18 教会 113 2012 19～28 聖霊 113 2012 29～44 教導権 113 2012 45～51 信望愛 113 2012 52～61 霊性 113 2012 62～69 聖餐 113 2012 70～81 ヨブ記 113 2012 82～95 基礎神学 113 2012 96～109 第二バチカン公会議 113 2012 110～125 カトリック学校 114 2013 2～10 カトリック学校 114 2013 11～15 カトリック学校 114 2013 16～24 カトリック学校 114 2013 25～37 カトリック学校 114 2013 38～43 カトリック学校 114 2013 44～51 カトリック学校 114 2013 52～56 カトリック学校 114 2013 57～63 カトリック学校 114 2013 64～82 カトリック学校 114 2013 83～92 カトリック学校 114 2013 93～105 図像学 114 2013 106～110 黙想 114 2013 111～114 教皇 114 2013 115～117 教皇 114 2013 118～122 教皇 114 2013 123～126 教皇 115 2013 2～5 信仰生活 115 2013 6～21 ギリシャ正教の神学 115 2013 22～44 ギリシャ正教の神学 115 2013 45～46 随想 115 2013 47～65 霊操 115 2013 66～80 霊操 115 2013 81～92 宗教心理 115 2013 93～104 無神論 115 2013 105～114 司教の団体性
カトリック教育聖省 百瀬 文晃 M・D・シュニユ Y・コンガール E・スキレベークス K・ラーナー H・U・v・バルタザール X・レオン・デュフル J・ダニエル H・ド・リュバック W・バイネルト		
カトリック教育聖省 高祖敏明 米国イエズス会大学協会 尾原 悟 レンゾ・デ・ルカ P・サムウェイ V・スチュワート イエズス会アジア太平洋協議会 ベネディクト十六世 浦 喜孝		
カトリック教育聖省 F・J・マルティネス＝メディナ G・モンタギュー J・A・コモンチャク J・カー M・ヘブルスワイテ D・オレアリー 浜口 末男 V・ロスキー V・ロスキー 磯村 ロサ B・クノルン N・スタンダード N・ヒンターシュタイナー A・コント＝スポンヴィユ C・テオボルド		

A・メニケス	捕囚期以前の唯一神礼拝に関する神学的発展史	115	2013	115～124	古代イスラエル史
百瀬 文晃	〈巻頭言〉下からのキリスト論	116	2014	2～4	キリスト論
G・グティエレス	神について語る —解放の神学の方法—	116	2014	5～13	解放の神学
L・ボフ	解放のプロセスとイエス・キリストにおける救い	116	2014	14～27	解放の神学
J・ソブリノ	ラテンアメリカ —罪とゆるしの地—	116	2014	28～42	解放の神学
A・ピエリス	イエスの貧しさに倣うとは	116	2014	43～57	清貧
E・シュスラー＝フィオレンツァ	フェミニスト神学の役割 —沈黙を破り、存在を示す—	116	2014	58～72	フェミニスト神学
H・キュンク	エキュメニカルな諸宗教の神学に向けて	116	2014	73～82	エキュメニズム
R・パニカー	至高体験 —東洋と西洋—	116	2014	83～95	諸宗教の神学
N・ローフィンク	主の祈りとモーセ五書	116	2014	96～102	主の祈り
V・ロスキー	創造（一節～三節） —『正教神学概論』（第二回）—	116	2014	103～118	ギリシャ正教の神学
岡田 友季子	〈巻頭言〉共同宣教司牧を通して	117	2014	2～4	信徒使徒職
P・レイクランド	「信徒」の概念	117	2014	5～13	信徒使徒職
M・C・L・ビンゲメル	第二バチカン公会議と信徒の登場	117	2014	14～22	信徒使徒職
W・ザイベル	教会における信徒	117	2014	23～25	信徒使徒職
A・J・ベヴィラクア枢機卿	信徒の役割 —ヨハネ・パウロ二世『信徒の召命と使命』より—	117	2014	26～38	信徒使徒職
有村 浩一	〈解説〉『信徒教会奉仕職の召命と公認』より	117	2014	39～41	信徒使徒職
C・A・ポバーツ	霊の賜物とキリストの体（一コリント12～14章）	117	2014	42～56	信徒使徒職
S・K・ウッド	信徒教会奉仕職の公認	117	2014	57～68	信徒使徒職
F・ジョージ枢機卿	これからの信徒教会奉仕職	117	2014	69～78	信徒使徒職
K・キルビー	二番目の性？ —新しい「女性神学」について—	117	2014	79～84	フェミニスト神学
W・J・パイロン／C・ゼヒ	彼らはなぜ教会から離れたか？	117	2014	85～91	司牧神学
V・ロスキー	創造（四節～六節） —『正教神学概論』（第三回）—	117	2014	92～109	ギリシャ正教の神学
中野 裕明	〈巻頭言〉聖ヨハネ・パウロ二世の思想	118	2015	2～5	ヨハネ・パウロ二世
J・セイヴィス	ヨハネ・パウロ二世の四半世紀	118	2015	6～9	ヨハネ・パウロ二世
M・トライポール	反対を受けるしるし	118	2015	10～25	ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	ヨハネ・パウロ二世の信仰の神学	118	2015	26～39	ヨハネ・パウロ二世
A・ダレス枢機卿	新しい福音宣教	118	2015	40～54	ヨハネ・パウロ二世
D・ドール	社会的関心と連帯の教え	118	2015	55～71	ヨハネ・パウロ二世
M・パクワ	ニューエイジ運動とヨハネ・パウロ二世	118	2015	72～79	ヨハネ・パウロ二世
ヨハネ・パウロ二世教皇	結婚と聖体 —いのちと愛の賜物—	118	2015	80～92	ヨハネ・パウロ二世
神学ダイジェスト編集委員会	ヨハネ・パウロ二世教皇公文書リスト（邦語版）	118	2015	93～96	ヨハネ・パウロ二世
V・ロスキー	原罪 —『正教神学概論』（第四回）—	118	2015	97～116	ギリシャ正教の神学
松浦 悟郎	〈巻頭言〉今、問われる平和	119	2015	2～5	平和と宗教
J・モルトマン	正義の実りとしての平和	119	2015	6～20	平和と宗教
M・ヴォルフ	宗教による暴力の正当化について	119	2015	21～28	平和と宗教
R・v・ジンナー	宗教と力をめぐる政治神学	119	2015	29～38	平和と宗教
G・ヴァノニ	シャロームと聖書	119	2015	39～47	平和と宗教
姜 禹一	済州島カンジェオン村平和会議より	119	2015	48～60	平和と宗教
F・ウィルフレッド	平和と和解のための文化資源	119	2015	61～73	平和と宗教
M・ハインツ	独身制と結婚 —犠牲を分かち合う—	119	2015	74～80	修道生活
J・マローン	修道生活における老いの霊性	119	2015	81～95	修道生活
匿名	うつと共に生きる	119	2015	96～97	修道生活

総目録

K・シャッツ	再興二百年の新しいイエズス会	119	2015 98～111	イエズス会
A・スパダロ	回勅『ラウダート・シ』への手引き —創造主への賛歌 皆の家を守るために—	119	2015 112～125	環境
鳥巢 義文	〈巻頭言〉生活の中で追体験されている父と子と聖霊	120	2016 2～5	三位一体論
K・ラーナー	三位一体に関する考察	120	2016 6～30	三位一体論
B・M・ドイル	社会的三位一体神学と交わりの教会論	120	2016 31～48	三位一体論
A・デーケン	三位一体の似姿としての人間 —三位一体論的倫理のために—	120	2016 49～56	三位一体論
M・アマラドス	ただ一つの霊と神の多様性について	120	2016 57～67	諸宗教の神学
A・T・ケイルガ	今日の秘跡 —空疎な象徴主義か、オカルト的秘術か—	120	2016 68～81	秘蹟論
O・フックス	聖書の中の暴力 —すべてわたしたちを教え導くため(ロマ15・4)—	120	2016 82～95	暴力
V・ロスキー	キリスト論〈一節～四節〉 —『正教神学概論』(第五回)—	120	2016 96～117	ギリシャ正教の神学
C・ラム	家庭に関するシノドス	120	2016 118～124	家庭
光延 一郎	〈巻頭言〉『ラウダート・シ』と原子力発電	121	2016 2～5	エコロジーの神学
T・カルヒャー／J・ユーベルメッサー	私たちの姉妹である母なる大地のために	121	2016 6～9	エコロジーの神学
D・ファレス	貧しさとこの惑星の脆弱さ	121	2016 10～24	エコロジーの神学
O・エーデンホーファー／C・フラッハスラン	地球共有材への配慮を！	121	2016 25～37	エコロジーの神学
L・ラリヴェーラ	イデオロギー的批判を越えて	121	2016 38～48	エコロジーの神学
	被造世界への義務(前編) —エネルギーとの持続可能な関わり方について			
ドイツ司教協議会	の提言—	121	2016 49～64	エコロジーの神学
V・ロスキー	キリスト論〈五節～六節〉 —『正教神学概論』(第六回)—	121	2016 64～75	ギリシャ正教の神学
J・グラナドス	主の昇天の神秘	121	2016 76～91	キリスト論
J・L・スカ	民数記における古いものと新しいもの	121	2016 92～103	民数記
神庭 靖子	〈巻頭言〉さまざまな家族の形の中で子どもたちの思いは	122	2017 2～6	巻頭言
X・A・サンタマリア	結婚と離婚についてのイエスの教え	122	2017 7～15	結婚・離婚・再婚
J・M・ゴルド	結婚の不可消性の教え —真理と憐れみ—	122	2017 16～22	結婚・離婚・再婚
J・I・G・ファウス	結婚・離婚・再婚をめぐる神学的諸相	122	2017 23～31	結婚・離婚・再婚
J・マシア	夫婦の一致における約束、合意、シンボル	122	2017 32～48	結婚・離婚・再婚
E・ショッケンホフ	結婚の不可消性と再婚	122	2017 49～65	結婚・離婚・再婚
M・R・ダンジェロ	福音と家庭	122	2017 66～78	結婚・離婚・再婚
A・マッテオ	信仰なき最初の世代	122	2017 79～86	福音宣教
カナダ司教協議会	福音派キリスト教についての考察 —隣人との対話に向けて—	122	2017 87～100	エキュメニズム
	被造世界への義務(後編) —エネルギーとの持続可能な関わり方について			
ドイツ司教協議会	の提言—	122	2017 101～116	エコロジーの神学
M・シーゲル	〈巻頭言〉社会教説とは	123	2017 2～7	社会教説
J・フェアシュラーテン	教皇フランシスコと教会の社会教説 —社会へと深く入り込みながら—	123	2017 8～16	社会教説
J・C・スカノーネ	教皇フランシスコと「民の神学」	123	2017 17～33	社会教説
C・F・ヒンジー	カトリック社会教説と労働正義	123	2017 34～48	社会教説
J・M・ベルゴリオ	キリスト教信仰とヒューマニズム	123	2017 49～54	社会教説
D・K・フィン	社会の構造的罪とは何か	123	2017 55～68	社会教説
W・G・ジャンロンド	愛と沈黙	123	2017 69～77	愛
V・ロスキー	聖霊の働き —『正教神学概論』(第七回)—	123	2017 78～89	ギリシャ正教の神学
T・ゼーディング	ルターの聖書釈義と教会改革	123	2017 90～108	ルター
竹内 修一	〈巻頭言〉人格としての性	124	2018 2～7	性的マイノリティー
S・クナウス	キリストの虹色の体とクィア神学	124	2018 8～18	性的マイノリティー

総目録

P・I・オドゾー	同性婚をめぐる議論	124	2018 19～26	性的マイノリティー	
J・グラミック	米国における同性婚	124	2018 27～33	性的マイノリティー	
J・クレイグ	アイルランドにおける同性婚合法化	124	2018 34～38	性的マイノリティー	
R・ウィリアムズ	レイシズムと教会 —「審判の朝が来るまで、私が誰であるのか誰も知らない」	124	2018 39～56	性的マイノリティー	
J・F・キーナン	罪をめぐる新たな理解とその可能性	124	2018 57～72	罪	
I・デリオ	私たちは神の導きを変えることができるのか？	124	2018 73～80	進化論と創造論	
V・ロスキー	教会の神秘 —『正教神学概論』(第八回)—	124	2018 81～105	ギリシャ正教の神学	
N・キング	主の祈りの翻訳 —「誘惑」もしくは「試み」—	124	2018 106～109	主の祈り	
福島 裕子	〈巻頭言〉黙示録のヨハネを巡る歴史的状況	125	2018 2～7	黙示録	
J・エバツハ	聖書の黙示文学 —「いつまでもこのままではない」—	125	2018 8～19	黙示録	
X・A・サンタマリア	模範としてのヨハネの黙示録	125	2018 20～29	黙示録	
C・M・アルバレス	ポストモダンにおける終末論と黙示思想	125	2018 30～42	黙示録	
J・B・メッツ	時間のうちにある神 —キリスト教の黙示文学的ルーツ—	125	2018 43～54	黙示録	
加藤 久美子	フクシマ後に、聖書を読む	125	2018 55～61	苦難	
P・R・マッカロー	苦しみと聖なる可能性 —神は憤り、涙する—	125	2018 62～73	苦難	
F・ウイルフレッド	マザー・テレサ —貧しき人々の聖人—	125	2018 74～80	聖人	
V・ロスキー	像と似姿 —『正教神学概論』(最終回)—	125	2018 81～98	ギリシャ正教の神学	
E・バルホルン	律法の詩編	125	2018 99～107	詩編	
西原 廉太	〈巻頭言〉聖公会における女性聖職	126	2019 2～7	女性の叙階	
A・トンブソン	ビンゲンのヒルデガルトはなぜ女性の司祭叙階を否定したか	126	2019 8～26	女性の叙階	
J・シールス	女性の司祭職について	126	2019 27～35	女性の叙階	
G・パニ	女性と助祭職	126	2019 36～46	女性の叙階	
P・ザガノ	女性助祭の復活 —小教区の公正なあり方のために—	126	2019 47～54	女性の叙階	
J・キッテル	助祭の霊性	126	2019 55～62	女性の叙階	
S・ペムゼル＝マイヤー	ジェンダーと霊性	126	2019 63～76	ジェンダー	
G・オコリンズ	『愛のよろこび』とその背景	126	2019 77～94	教皇フランシスコ	
R・マルクス	『ラウダート・シ』にみる教皇フランシスコの思想	126	2019 95～109	教皇フランシスコ	
佐藤直子	〈巻頭言〉哲学と神学 —トマス・ア・アクィナスの形而上学と霊魂論の素描から—	127	2019 1～6	哲学と神学	
C・ドアティ	ブロンデルの超自然の仮定における哲学と神学の共生	127	2019 7～31	哲学と神学	
F・プランマー	ポール・リクール —哲学者にしてキリスト者—	127	2019 32～43	哲学と神学	
N・A・ウォーン	ヨゼフ・ピーパーの「神学としての哲学」と科学	127	2019 44～68	哲学と神学	
J・V・シャル	ラッツィンガーが語る「理性」「啓示」「思考の冒険」	127	2019 69～87	哲学と神学	
A・イヴリー	教皇フランシスコとカリスマ刷新	127	2019 88～97	教皇フランシスコ	ペンテコスタ ル
H・ヘイカー	正義を求める共苦(コンパッション)	127	2019 98～109	苦難	
J・M・フェゲルト	性的虐待への取り組みに対する外部協力の可能性と限界 —聖職者主義の 代わりに共感を—	127	2019 110～126	性的虐待	
三田 一郎	〈巻頭言〉科学を通して少しでも神を理解できるか	128	2020 2～15	創造と科学	
R・ヘイト	霊性、進化、創造者なる神	128	2020 16～39	創造と科学	
L・ボフ／M・ハサウェイ	エコロジーと自然の神学	128	2020 40～50	創造と科学	
D・M・ノスウェア	教会の使命としてのエコロジー正義 —宇宙の救済のために—	128	2020 51～67	創造と科学	
C・ディーネ＝ドラモンド	十字架と復活の知恵のしるしのもとに創造と新創造を解釈する	128	2020 68～77	創造と科学	
J・F・ホート	未完成の宇宙における信仰とコンパッション	128	2020 78～91	創造と科学	

総目録

ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	128	2020 92～98	霊性心理	
ドイツ・カトリック正義と平和委員会	核軍縮の出発点としての核兵器非合法化	128	2020 99～118	反核兵器	
勝谷太治	〈巻頭言〉新しい教会の姿、真のシノダリティ―(共に歩むこと)を目指したシノ	129	2020 1～5	若者と共に歩む教会	
A・スパダロ	若者シノダスと使徒的勧告『キリストは生きている』	129	2020 6～32	若者と共に歩む教会	
D・ファレス	霊的識別 ―『キリストは生きている』より―	129	2020 33～45	若者と共に歩む教会	
B・レップペン／J・バルツ／L・オッテ／K・	若者の参加に基づく青少年神学	129	2020 46～53	若者と共に歩む教会	
P・M・トーマス／V・ヒューネルフェルト	教会の決定に関する若者の参加	129	2020 54～60	若者と共に歩む教会	
J・パーケス	「働く学校」 ―イエズス会によるカトリック学校モデル―	129	2020 61～66	カトリック学校	
G・ゲーデ	女性の助祭職は教会にどのような変化をもたらしうるか	129	2020 67～70	女性の叙階	
M・エーブナー	新約聖書は「同性愛」を禁じているのか	129	2020 80～87	性的マイノリティ	
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	129	2020 88～94	霊性心理	
イ・キホン	朝鮮半島南北カトリック教会の交流	129	2020 95～108	地域教会	
D・ホレンバッハ	パンデミックで最も苦しむのは誰か	129	2020 109～114	COVID-19危機	
D・J・デイリー	治療配分に関するカトリック的ガイドライン	129	2020 115～124	COVID-20危機	
岩本潤一	〈巻頭言〉『聖書 聖書協会共同訳』発行の意義	130	2021 1～7	聖書の翻訳と解釈	
W・T・ディケンズ	典礼が聖書解釈に及ぼす影響	130	2021 8～22	聖書の翻訳と解釈	
D・カーハン	聖書解釈の視点としての空間性 ―ヨハネ福音書9章を例に―	130	2021 23～38	聖書の翻訳と解釈	
B・トゥリムペ	間テクスト解釈とは ―創世記1章とエレミヤ書4章23～28節を例に―	130	2021 39～47	聖書の翻訳と解釈	
	「私たちを試みに導くことのないように ―主の祈りが問う、悪魔についての語り」と私たちの神観―	130	2021 48～57	聖書の翻訳と解釈	
H・ホーピング	「試み」と「試し」 ―心騒がせる一つのテーマに関する新約聖書の解釈―	130	2021 58～72	聖書の翻訳と解釈	
H・U・ヴァイデマン	翻訳学と解釈学	130	2021 73～90	聖書の翻訳と解釈	
J・グレーシュ	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	130	2021 91～97	霊性心理	
ホン・ソンナム	良心、カトリシズム、政治	130	2021 98～113	カトリシズムと政治	
D・E・デコッセ	神学の座としての社会的エコロジー	130	2021 114～119	カトリシズムと政治	
M・フォークト	新回勅『フラテッリ・トゥッティ』の呼びかけ	130	2021 120～124	カトリシズムと政治	
B・マッコミック	〈巻頭言〉今日のマリア論について	131	2021 1～6	マリア論	
岡立子	神学の内に示されるマリア論の新たな方向性	131	2021 7～16	マリア論	
M・マッケンナ	貧しい人々と現代の「霊」が示すマリアの教義の意味	131	2021 17～40	マリア論	
I・ゲバラ／M・C・ビンゲメア	マリア研究の母体としてのガリラヤ	131	2021 41～60	マリア論	
E・A・ジョンソン	正教会とカトリック教会の神学におけるマリア論	131	2021 61～82	マリア論	
B・E・デイリー	ニコラオス・カバシラスの『受胎告知についての説教』を読む	131	2021 83～101	マリア論	
P・プロスペリ					
J・アローショ＝エステベス	聖ヨセフ年 ―父の心で―	131	2021 102～105	聖ヨセフ年	『使徒的書簡 父の心で』
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	131	2021 106～112	霊性心理	
石居基夫	〈巻頭言〉「恩恵論」に寄せて	132	2022 2～8	恩恵論	ルター
P・オキヤラハン	ルターと〈恩恵のみ〉	132	2022 9～26	恩恵論	ルター
L・マシュー・ペット	恩恵と経験の神学的問題 ―ロナガンの視点から―	132	2022 27～46	恩恵論	ロナガン
D・グルーメット	恩恵と「純粹自然」 ―ド・リュバックの見方―	132	2022 47～67	恩恵論	ド・リュバック
J・コブレンツ	抑鬱状態における恩恵の可能性	132	2022 68～83	恩恵論	心理学
A・パリアリーニ	旧約聖書における「食べること」の役割	132	2022 84～96	旧約聖書神学	
C・ドーメン	モーセ五書の構成と内容 ―五つの五つの―	132	2022 97～103	モーセ五書	
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	132	2022 104～107	霊性心理	

総目録

原敬子	〈巻頭言〉女性(おんな) —存在と所有の揺らぎ—	133	2022 2～7	女性をめぐる神学
B・ハレンスレーベン	神の霊との関係における女性の神学	133	2022 10～12	女性をめぐる神学
A=M・ペルティエ	カトリック教会と女性的次元	133	2022 13～16	女性をめぐる神学
A・デルミアンス	女性の神学とフェミニスト神学	133	2022 17～37	女性をめぐる神学
P・アレン	二十年後の『女性の尊厳と使命』と課題	133	2022 38～52	女性をめぐる神学
ヨハネ・パウロ二世	女性への手紙	133	2022 53～65	女性をめぐる神学
R・R・リュースー	キリスト教伝統における性差別と女性蔑視 —解放をもたらすために—	133	2022 66～83	女性をめぐる神学
A・M・イサシ=ディアス	ムヘリスタ神学 —伝統的神学への挑戦—	133	2022 84～101	女性をめぐる神学
S・A・ボング	アジアのフェミニスト神学から『ラウダート・シ』への応答 —人間／男のためだけに—	133	2022 102～120	女性をめぐる神学
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫 〈連載 霊性心理〉	133	2022 121～123	霊性心理
光延一郎	《巻頭言》「神学的人間論」未完の展望	134	2023 2～7	神学的人間論
K・ラーナー	カトリック神学的人間論の提起	134	2023 8～20	神学的人間論
M・ドーク	性、人種、文化 —二十一世紀の神学的人間論—	134	2023 21～37	神学的人間論
W・ヴァン・ハイスティーン	何が私たちを人間とするのか —神学的人間論とキリスト論の学際的課題—	134	2023 38～54	神学的人間論
T・ダムズデイ	生物学的分類学に照らした神学的人間論の可能性 —トランスヒューマニズムをめぐる—	134	2023 55～65	神学的人間論
J・ロジャーズ	シノダリティのための知恵	134	2023 66～74	教会論一般
M・サール	典礼参加へと招かれて(一) —典礼参加の三つの段階—	134	2023 75～93	典礼神学
E・オットー	旧約聖書におけるトーラー —五書の成り立ちとその意義—	134	2023 94～102	五書
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫	134	2023 103～105	霊性心理
成井 大介司教	〈巻頭言〉 諸問題に取り組むにあたって大切にしたいこと	135	2023 1～6	現代の諸問題に教会はどう応えるか
D・アルバートソン／J・ブレイクリー	夢見る教皇フランシスコ——より良い政治を夢見る信徒を——	135	2023 7～14	現代の諸問題に教会はどう応えるか
J=P・バテュ	悪の問題を試される全能の父	135	2023 15～26	現代の諸問題に教会はどう応えるか
J・B・メッツ	神とこの世の悪——忘れてはならない神義論——	135	2023 27～32	現代の諸問題に教会はどう応えるか
H・P・コスター	人新世における罪と救い——気候変動、新型コロナ、ジェンダー公正——	135	2023 33～41	現代の諸問題に教会はどう応えるか
S・G・コチュタラ	多元主義的状况におけるカトリック倫理	135	2023 42～57	現代の諸問題に教会はどう応えるか
D・F・ピラリオ	「見る・判断・実行」法——アジアからの提言——	135	2023 58～67	現代の諸問題に教会はどう応えるか
Z・マートラナ	信仰から行動へ——東ティモールの若者の教育に携わる私たちのミッション——	135	2023 68～75	現代の諸問題に教会はどう応えるか
N・ローフィンク	現在と永遠——コヘレトの言葉における時間——	135	2023 76～87	旧約聖書神学_コヘレトの言葉
M・サール	典礼参加へと招かれて(二)——典礼の内面的観想的次元——	135	2023 88～104	典礼神学
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫	135	2023 105～109	霊性心理
瀬本 正之	〈巻頭言〉 キリスト教ヒューマニズム	136	2024 2～8	キリスト教ヒューマニズム

総目録

T・ツイーマン	イグナチオ的教授法——ヒューマニズム ^{プラス} の精神——	136	2024 9～19	キリスト教ヒューマニズム
A・ル・ドゥック	キリスト教ヒューマニズム、人間中心主義、エコロジー危機	136	2024 20～35	キリスト教ヒューマニズム
A・ラッフェルト	カール・ラーナーとキリスト教ヒューマニズム	136	2024 36～51	キリスト教ヒューマニズム
J・C・マーレイ	キリスト教ヒューマニズムに向けて——教育と神学との関わり——	136	2024 52～63	キリスト教ヒューマニズム
R・ケッスラー	トラーと人権	136	2024 64～73	旧約聖書神学
T・レーマー	ヘブライ語聖書における戦争——史実とフィクションのはざま——	136	2024 74～84	旧約聖書神学
S・フォンタナ	コロナ禍における社会教説の忘却	136	2024 85～96	社会教説
M・サール	典礼参加へと招かれて(三)——典礼の外面的公共的次元——	136	2024 97～113	典礼神学
ホン・ソンナム	私は思ったより大丈夫	136	2024 114～117	霊性心理
P・ザガノ	女性助祭についてのシノドスの識別	136	2024 118～122	女性をめぐる神学
菅原裕二	巻頭言 奉獻生活を考える	137	2024 1～6	奉獻生活
M・チェルニー	回勅『兄弟の皆さん』から修道者へのメッセージ	137	2024 7～12	奉獻生活
C・デル・バリェ	神の優しさを示すために	137	2024 13～27	奉獻生活
V・コディナ	修道生活——カオスから「カイロス」へ？——	137	2024 28～43	奉獻生活
A・ニコラス	使徒職の共同識別	137	2024 44～58	奉獻生活
E・ツェンガー	詩編における死のイメージ——生を求めて神と闘う——	137	2024 59～73	奉獻生活
A・ウェナン	物語と読者——物語分析的聖書解釈の可能性——	137	2024 74～93	奉獻生活
D・マルクル	物語と聖書——移動する民が書いた書物——	137	2024 94～102	奉獻生活
B・マクマヌス	うつ(落ち込み)に取り組むためのイグナチオの手引き	137	2024 103～108	奉獻生活
酒井 陽介	〈巻頭言〉教会における公正な人についての個人的な思い	138	2025 1～8	カトリック教会における男性性
L・ボフ	聖職者の独身制と性	138	2025 9～14	カトリック教会における男性性
T・ハイマール	聖職者の男性性——本質的に異質なのか？——□	138	2025 15～24	カトリック教会における男性性
H・アンダーソン	男性性を再構築する神学□	138	2025 25～39	カトリック教会における男性性
J・H・ルビオ	教会の中の男性性と性虐待	138	2025 40～51	カトリック教会における男性性
D・ビソン	男性のための霊的同伴——氷山を溶かす——□	138	2025 52～62	カトリック教会における男性性
J・キャロル	司祭職を廃止せよ□	138	2025 63～87	カトリック教会における男性性
N・デニセンコ	プーチンのロシアにおける正教会のイデオロギーと男性性	138	2025 88～99	カトリック教会における男性性
石川 治子	シノドスに見る日本の教会の女性感覚とこれからの男女協働□	138	2025 100～105	カトリック教会における男性性
P・セルー	ルカ福音書のたとえ話における内的独白□	138	2025 106～123	カトリック教会における男性性

総目録

S・アガスティン	〈巻頭言〉「核兵器の保有そのものが倫理に反する」—真の人間の安全保障を目指して—	139	2025 2～7	人間の安全保障とカトリック教会
E・ギレン	倫理的かつ政治的に有用な「人間の安全保障」のために	139	2025 8～18	人間の安全保障とカトリック教会
R・A・クイン	安全の必要と限界—神は我が砦—	139	2025 19～29	人間の安全保障とカトリック教会
K・ヴェンツェル	安全の必要性を神学する—「安全」の脱構築—	139	2025 30～39	人間の安全保障とカトリック教会
L・S・ケイヒル	理論としての「正しい戦争」、徳としての「正しい平和」	139	2025 40～57	人間の安全保障とカトリック教会
A・B・ド・デーム	ニケア公会議—七〇〇周年国際神学委員会文書『イエス・キリスト、神の子、救い主』について	139	2025 58～72	人間の安全保障とカトリック教会
T・レーマー	文明と—神教	139	2025 73～82	人間の安全保障とカトリック教会
J・N・アレツティ	パウロ書簡の教会論についての研究——神学的アプローチと社会史的アプローチ—	139	2025 83～101	人間の安全保障とカトリック教会
R・J・クリフォード	箴言における注意喚起の技法——お耳を拝借！——	139	2025 102～112	人間の安全保障とカトリック教会
秋葉 悦子	〈巻頭言〉AI技術の規制——執事としての自律的管理責任——	140	2026 2～8	今日のカトリック倫理神学
J.F.キーナン	倫理的行為者としての集団	140	2026 9～30	今日のカトリック倫理神学
竹内 修一	良心と根本的選択	140	2026 31～44	今日のカトリック倫理神学
W.オニール	教皇フランシスコによる技術主義パラダイム批判	140	2026 45～69	今日のカトリック倫理神学
P.シャーツ	AI倫理学のために	140	2026 70～89	今日のカトリック倫理神学
R.W.マケロイ枢機卿	セクシュアリティに関する罪と聖体拝領——LGBT、離婚して再婚した信者の〈徹底した包摂〉への批判に答えて	140	2026 90～97	今日のカトリック倫理神学
K.シュミート	人はいかにして神の似姿となったか——古代イスラエルにおける民主化のプロセス——	140	2026 98～113	今日のカトリック倫理神学